

增補雅言集覽

四十七

813.6

I 619g

W
N. J.

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

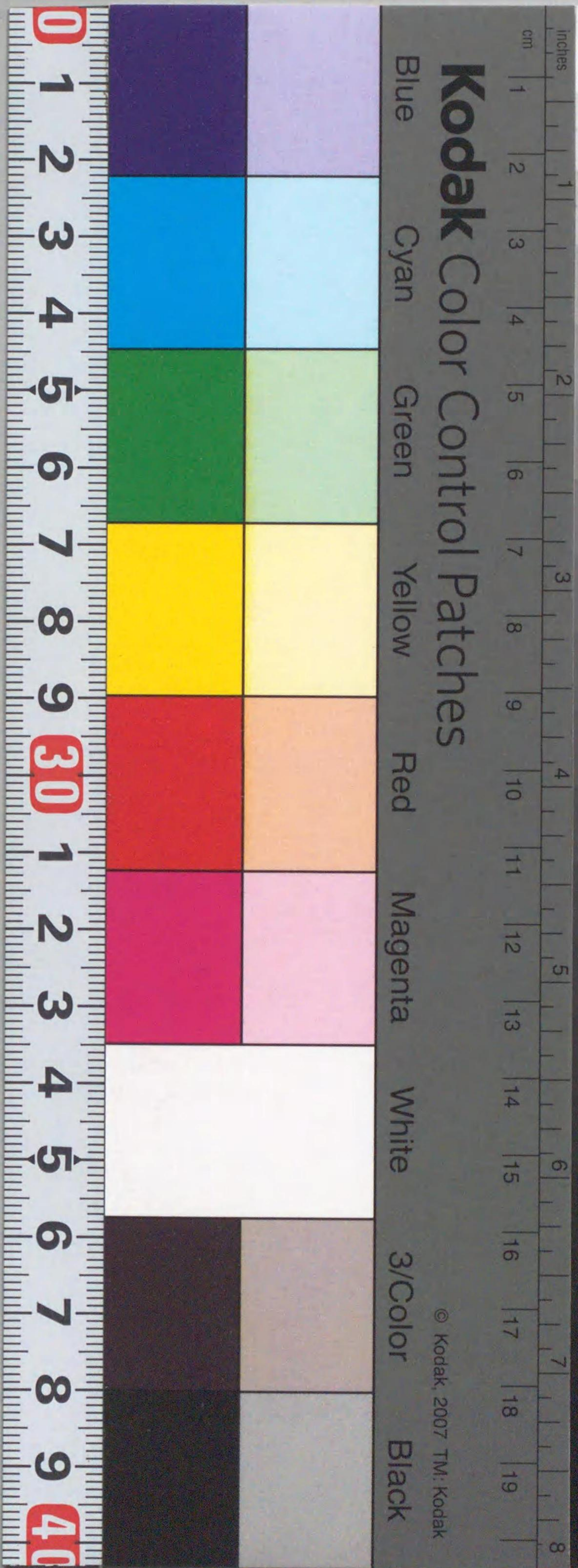


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



813.6
I 6199
NND



691363

増補雅言集覽卷之四十七

石川雅望集
中島廣足補

○左の部

さん 産 (拾) 賀 雑ある人産して侍る七夜哥云々

さん 算 (發心集) 廿四 うちやぶられたる家ども算をうち散せるがごとし **圃** (宇治拾) 十

唐人の算いとトくおくありそれよあひて算おくことならんといひければ (同) 算をさらくとおさるたりおさそて、ひろさ七八分をりの算のありけるを一とりいで、

圃 さむ 醒 (大和物) 百五 かつ文もやらんと酔さめて思ひけるよ (堀次) 出湯「よと

ともよまたまた火のかけれどもまねのまゆいさむるともな (風雅) 夏 太上天皇「風とたる田面の早苗いろさめて入日のこれる岡の松原 (源 稚か本) 十 思ひあぐさ

むかゝ有てこそかあさをもさまものかめれ
○戀のさむる (拾) 戀二 「あひてもあふあぐさまぬ心りあいく千世ねてり戀のさ

むべき (六帖) 下五 「日ぐらゝ鳴どもあやから衣袖こそひぢめ戀のさめトを

さんぞう 三寶(源手習)四十とまれかくまれおぼしとちての給ふを三寶のいとかい
こくほめ給ふ事あり

さんたん 讚歎(源御法)五薪こるぞとのさんたんの聲も

さんまい 三昧(源わか紫)十法花三昧おこかふ懺法の聲(同あかし)十いりめしき堂
をたて、三昧行ひ(同椎か本)十三昧けふもてぬらんといつりりと待聞え給ふ夕暮

一人まゐりて(河海)三昧梵語也此云正受又名正定法花三昧念佛三昧ナド、テ他事
ナク其ノミ行フナイフ也(楞嚴經)云勢至菩薩云我遇無量光法教念佛三昧專注一
心佛憶衆生如子念佛如父何不見之

さんまいたう 三昧堂(枕)八うらやましき物、三昧堂さて、宵曉よいのられたる人

(源浮舟)九ふたんの三昧堂かといとふとくおきてられたりとかん聞給ふる

さんけ 懺悔(金槐集)下堂をたて塔をつくるも人かけきさんけよまさるくとくやれ
ある(翻譯名義集)四懺名修來悔名改往往日所作不善法鄙而惡之故名爲悔往日所
棄一切善法今日已去誓願勤修故名爲懺棄往來故名懺悔又懺名披陳衆失發露遇咎
不敢隱諱悔名斷相續心厭悔捨離能作所作合棄故言懺悔
さんけん 讒言(宇治拾)十この事申人の讒言よも侍らん

さんざ 參座(源紅葉賀)十三さんざしよとてあまの所もありきまをせ(同初音)三

夕つりさ御りさのさんざし給さんとて心ことよひきつくろひけさうと給ふ御
りけこそけし見るりひあめれ

さんと (續古事談)三ひるのおろしをバ女房云々そのことたどのよてふみまべりて
さりさまよふれてさんとようちららしてけり(著聞)十二うみ柿のおちける
が云々つぶれてさんとよちりぬ(同)十六うつくしき装束さんとよなりよけり

(同)廿穴よどりあてさるまらもそづれてしとさんとよせちらされよけり

さんさう 山莊(拾雜)北白川の山庄よ花の面白くさきて侍りけるを見よ人々まうで
來りければ(盛衰)七十五所々の御山庄りををつくりむねをあらべ

三明六通 觀經(末四)應時即得阿羅漢道二三明六通具八解脫、注宿住智證明治前際愚死
生智證明治後際愚漏盡智證明治中除愚名之三明又加神境天眼天耳都名六通

三明六過(四季物語)正月をとも鳥の聲花まつ計よ心りらのとやりよさへづり
いで谷の氷も音をへて聞ゆるの三明六過の佛の御みよ云々

さむい 寒(源夕顔)十あそれいとさむい(同初音)十さるおり物のうちきをき給へ
るいとさむけよ心ぐる(同)三かまぎぬさへとられよのちさむく侍ると聞え給

ふ補(土佐日記)「ちよへさる松よのあれといよへの聲の寒さのかそらざりけり
○さむひけく(詞花)戀下「あさぢふよけさおく露のさむひけきよかれよ一人のなぞや
戀しき

○補さむら(万)九ノまぎたへのころも寒等^{サムラ}よぬを玉の髪いとたれて

さむいろ 眞筵(古)戀四「さむいろよ衣かたしきこよひもや我をまつらん宇治の橋姫

○眞筵ナリさ衣さ夜さを鹿さぬるナドノ類ノさミナ同ク眞ノ心也小ノ字狹ノ字ナ
ドヲカクハアタラズ

三史五經(源 帝本)廿三史五經の道々をさきりたをあきらりよさととりありさんあそ
ハ史記漢書後漢書五經ハ
毛詩禮記春秋易尙書

さんせん 參(枕)十八さんせんとをけるをけふの御物いとよてせん
さんす 譏ス(枕)二メノトよくき物いさゝりも此御ことよさかふものをバ譏一人を
若君ナリ

バ人ともおもひさらせ

さう 喪(拾)雜秋冬親のさうよあひて侍りける法師のもとよつかさしける

さう 左右(源わのな)上七。入道夢ガタ 山の左右より月日の光さやうよさし出て世
をてらせ

さう 姓(榮月の宴)五十左大臣よ源氏の兼明と聞ゆるかり給ひぬ是の醍醐のとりぞ
の御子よおそして姓えてたゞ人よておそしつるかりけり(空穂 藤原君)廿六くくてい

やしき人の腹よ生れ給へる御門の御子三春といふさうを給りて

さう 相(源 桐つは)廿かこき相人ありけるを聞いめて云 帝王のかとあき位よ登
るべき相おそしませ人のこなたよてみればまたれうれふることやあらんおそやけ

のかためとなりて天下をたまくる方よてこれバ又其相たがふべしといふ(古事談)
延喜御時相人相者參來 云々 相者所見大所爲耻也(源 輔)廿かからせ世中さもつべき
相ある人あり

○さうにん 相人(源 桐つは)廿相人おどろきてあまよびかさふきあやふ國の親
とかりて

○やまとさう 大和相(源 桐つは)廿みりどかこき御こゝろよ大和相をおふせてお
やよりよける筋かれバ云々

さう 草。書(空穂 國讓)下五給一柱よせよ哥云々 とさうよかきこり
也 草書コテカ

キタル(源 あふひ)四十 さうよもまかよもさまよよめづらささまよかきませ給
ナリ(同 繪合)九 さうのてよかかかの所々よかきませせて補(同 常夏)廿 さうの文字ハ
六

え見しらねばよやあらん(うつは 藏開)中ノ一はさうくたりおかトこと

○さうがを 草假名(枕)九、人のさうがをか死たる草紙とりいで、御らんを誰がより

あらんかれよとせさせ給へそれぞ世もある人のてのみりて侍らんと云々

○補 さうがち(源常夏)廿あをささき一ひとりさねよいとさうがちよいうれるての

そのせちとも見えど(狭)三、いまやうのていさうがちよこくうをささきとつぎまぎら

むして

さう 莊。御(源をま)十領一給ふ御莊御牧よりとめてさるべき所々の券かど皆奉

り置給ふ(同 浮舟)卅^領ときかたがをちの因幡守なるがらうむるさうよそりあうつく

りたる家なりけり(同 夕きり)九 隨身などのをのこどもはくるをの、さうちり、ら

んまくさかどとりかませて(補)同(東や)五十さうのもれどもの中びたるめいいで

てつけよとのまふ

さうどう 騷動(淮南子)秦族訓外内騷動(後漢書)陳忠傳、河水涌溢百姓騷動

さうとき(源空蟬)四 とうちむて、けちさすこたり心とけよとえてきま、さうさ

うとけバ(同 夕うほ)四十 かよの心をせありけもかくさうときをこりさりよ(同

胡蝶)六 藤の花をかさして、あよびさうとき給へる御さまいとをり(同 竹川)十を

ながのひとがなつりうととるをとりあへたるま、まかづけ給ふなよをもぞか
どさうときて侍従のあるトの君よ打かづけていぬ(孟)イソガシク物サワガシキナ
リ(補)源藤末葉)八 御ときよくさうときて藤のうら葉のとうちをんと給へる御けい
さを給そりて(玉小櫛)ニ云此詞いさ、り心えせよき時分とてといふ意りさうど死
ていさよぎたつ意也廣足云うつ不俊蔭よ御時よくあそびて入たまふとあるもて此
詞の意をおもひあるべし

補 さうり(職人盡歌合)さうりあやうりく、いたこんさうめせ

さうがう(枕)九、うちとる死ぬのあざやうあるまさうがうのあらで髪のみりや

られたる

さうが 唱歌(源をとめ)十 秋風樂よかきあそせてさうが給へる聲いとおもしうけ

れバ

さうがよ(著聞)十 打しきふたあるのさうがよ白き文をぬひたり(永承五年正子内

親王繪合詞書)ニうちしきふたあるのさうがよあろき文をぬひたり云々うちしきふ

りまどりのさうがよぬひものたり

さうがん(榮煙の後)八 せんれうのもからぎぬさうがんを物かどかねしてつく

りたるよ菊のをりえた松あとぬひさるいとをりおり物のうのぎあれとからぎぬ
かどのさうがんうを物かどをたたりおりものにあつくぬひものゝゑぐくも中々こ
ろけれ成べ(同 歌合)七ふたあるのうつくしきとりてひろけしをこれに紫のふ
せんれうよあをささうがんをつけていせの海といふさいをあらをあいでよぬひたり
(枕)ノ六地まりのかうのうを物よさうがんかさねたる御もあと奉りたり○春曙抄
象眼唐のさぬの名かり桃花葉の御説かり 師説ほそき泥畫かどしたるなり(榮歌
合)十まぎをこをあけてほり物のはねよさうがんの紙をそりて題の意をさまとよ
かきたるあふぎをひとつづとりて講師つねなりの弁にとらす(同 根合)六十春の
いろくをおりつくしとりをたのころさいどもよくれあるのうちさるもえぎ
のふたへもんのころさいのさうがんのからぎぬ 云々(同)四十さうがんとどりの
裳こんるりのからぎぬこれも大なる川をうつしとり(同)五十哥く物にさうし十帖を
ろりねこがねふせんれうさうがんをつくして二づゝあろりねこがねのいとをもん
よむをびて玉をもんよをえたり(瀆松物)一すもうのをそこのさうがむのさちや
うひとへうちあけて

さうそ(葬送)源(源晴蛤)十御さうそ(源)の事(殿)よこと(の)よ(申)させ給ひて日定めら

れていりめしうこそつりうまつらめかといひれれど(後拾)哀長祿二年十二月よ皇

后うせさせ給ひてさうそ(源)の夜雪のふり侍りければ

さうぞく(源 梅かえ)八御こと(源)のさうぞくかどして(後)春(中)さうぞく(一)くどりて

うとてつりまをとて(同 帚木)四十(二)がみくし(三)どのよの給ひてさうぞくかどもせ

させ給ふ(同 若紫)五十(四)車のさうぞく(五)さがら(同 さわらひ)九(六)内へまゐり給ひんと

て御車のさうぞくして(伊勢物)四十(七)女のさうぞく(八)かづげんと(九)を

さうぞきたち(うつは 國讓)中(十)おと(忍)びて(局)よおます 云々(二)ら(お)と(お)り(さ)う

ぞき(ち)て待奉れど

さうぞきて(源 あふひ)廿(一)い(二)とき(三)よ(四)け(五)よう(六)ち(七)そ(八)う(九)ぞ(十)きて(十一)出(十二)給(十三)ふ(十四)を(十五)同(十六)胡(十七)蝶(十八)初(十九)ら(二十)め

いたる舟つくらせ給ひけるいそぎさうぞくせ給ひて(空穂 國讓)下(一)四(二)弟(三)の(四)宮(五)の(六)四(七)つ

云々(八)それ(九)も(十)同(十一)ト(十二)と(十三)さ(十四)う(十五)ぞ(十六)け(十七)給(十八)へ(十九)り(二十)同(廿一)俊(廿二)蔭(廿三)七(廿四)十(廿五)北(廿六)の(廿七)り(廿八)た(廿九)の(三十)琴(三十一)ど(三十二)も(三十三)の(三十四)さ(三十五)う(三十六)ぞ(三十七)く(三十八)を(三十九)くり(四十)て(四十一)云(四十二)々(四十三)ある(四十四)ト(四十五)の(四十六)お(四十七)と(四十八)ゞ(四十九)さ(五十)う(五十一)ぞ(五十二)け(五十三)お(五十四)り(五十五)れ(五十六)た(五十七)る(五十八)琴(五十九)ど(六十)も(六十一)を(六十二)と(六十三)う(六十四)で(六十五)さ(六十六)せ(六十七)て(六十八)源(六十九)葵(七十)四

三(一)これ(二)も(三)く(四)と(五)そ(六)う(七)ぞ(八)け(九)さ(十)う(十一)た(十二)る(十三)を(十四)見(十五)る(十六)よ(十七)つ(十八)け(十九)て(二十)も

さうなり撰集抄ニサナリナサウナリト所々ニカキタリ

さうあく(續世繼)六(一)の(二)女(三)房(四)給(五)そ(六)り(七)て(八)出(九)侍(十)ら(十一)ん(十二)と(十三)有(十四)け(十五)れ(十六)ば(十七)左(十八)右(十九)を(二十)き(廿一)こと(廿二)よ

て御車ともの人かどのちよて門のどまうけたりければぐして出給ひけり(宇治拾)十一さうなくのえせめ給とどおもひてこゝろ静し軍をへてゐるよ(同)八三ありさまをりていさうなくゆ殿へゆきてきたりよかりて(つれく)十一段七ふるくより此地をいめさる物からさそろかく堀をてられがたくとまな人申されけるよ(注)左右かくためらひもかくなり(今物語)さうなく人をとらふことあるべくもなきことよや(同)六申せといとさうかくぞ出されと(資長所記)件座被書載次第畢無左右事也(古事談)六八幡所司永秀古時無左右笛吹也(著聞)廿二その猿中ゆびをさして物ををいふる体かり人こゝろをえぞあやいとてさうかくも射ころさでををい見るさるよ(保元物)廿六無左右亂入ノ條々狼籍也トテ(同)廿九無左右近ヅカズ

さうかー 無雙(つれく)八十鳥よの雉さうかきものかり注 無雙のからびかき也

さうやく 草藥(源 帚木)三 かくねちのさうやくをふくして

さうやく 雜役(源 竹川)廿五 のことどもさうやくよとてまらはうとのらぎめいつりせたまへ(空穂 藏開)上 七何の數あるべき身よの侍らねとさうやくをも諸共よと思ひ給へてあん(同 國讓)下 七そこよをの子ども侍らん御身のりまのりよのさうやくもせさせ給へ(同)一七 七そやくより思ひたまへてゝろさし侍りよものをさうやくなど

よもつりひ給へ(源 行幸)九廿下らうわらそべかどのつりうまつりたへぬさうやくをもたちをいりやくをくまどひありきつ(蜻蛉日記)中 下すけの君の御いをぎも近うかりよたらんを其ほどのさうやくをたよつりうまつらん(榮 松のしつえ)十例の殿上人こそさうやくいつりまつるをせめてこゝろことよおをいめなるべし(源 若菜)上ノ御うまごの君達いづりたよつけてもおりたちでさうやくい給ふ(江次第)八 卅六 雜役ノ雜色

さうけん (源 柏木)廿五 いちあるさうけんかどのありなるよくと是なん此世のうれへあて云々(細)讒言なり

さうぶのこー 菅蒲興(榮 かやく藤壺)十 御くす玉さうぶの御こーかどもてまゐりたるもめづらうて(枕)九ノ三條宮よおまよまをころ五日の菅蒲の興かど持てまゐり薬玉まゐらせなど(讃岐内侍日記)さうぶの興朝餉の壺よかきたてゝひまもかくふきこを美豆野のあやめも今いつきぬらんととえしり

さうあい 草鞋(禁秘抄)中 如御草鞋六位奉仕

さうく 忽々(盛衰)七 七それをとらんくとする布どよかふりをさへつさおとされ

さりけれどもあまりの忽々よあててつゝそれをあたらせ(同)廿 世間もあよとかく

忽々かりつればせせまるれりかやうの御大事を思召たちけるよ云々

さうとく(源東屋)廿をりあーき御ゆせりの布どこそをぐるーかめれさうとく

くてやかがめん(空穂初秋)五十藤壺のまうのやり給とぬ二宮をがさうとくーき事

かの君のまうのやり給へらんこそけふのままひよりもとどころあべけれ(同藏開)

上八参られやするとおもひーよさもあらざりーくはいとさうとくーくかんありー

(同國讓)中五かく里よおそーませバかゝる者もちみゆやうちよこもりおそーま

せバさうとくーくおそ(同樓の上)下九若君を云々誰ぞととひきこゆれば大將の子

そくなくさうとくーくとして物しためると聞え給へバ(同帶木)十きとの打ねふりて

おととませ給とぬをさうとくーくこゝろやまーとおもふ(同)卅あまりうるそーき

御ありさまのとけがたくもづりーけよのみおもひあづまり給へるをさうとくーく

て(同)卅四十かうやうのをりこそをりーき哥をぞ出くるやうもあれさうとくーくや

(同桐つは)十わりき人々かあーきこといさらよもいそせ内をたりを朝夕よからひ

ていとさうとくーく(伊勢集)大和よ三月をりすむよさうとくーく寺めぐりせん

とおもひてありきなるよ○契ノ源拾遺ニさびーくと云ふべきをさうとくーくとい

ふ和語のからひ此類多し○鈴屋翁云拾遺よいへるがごとくつれとくーといふもさび

ーき事なるを同トさびーきもつれとくーとさうとくーといの意異かりつれとくーといす

べきことさのなくてひまよてさびーきをいひさうとくーといのあるべきものあるべき

事のかくてさらぬがさびーきをいへりこのけぢめを心えおくべー(同)枕(枕)七御もの

いとよこもりてさびがよさうとくーくこそあれ(源わかあ)下五昔よりとづらぞ

かゝる布いふりきをどまりてさうとくーくおぞされんこゝろくるーさよ(亭子院

歌合)序さふらそせとまうせをさうとくーくがらせたまふ

補さうさ(拾玉)八よかひもつさうたのいれこ町足駄よを行道のものどこそこれ

さうとく(障子源末つじ)十五ふとまのきをるさうとく手づらいとつよくさして(同

帶木)卅火ともしたるを死けさうとくのかえよもりたるよ(狭)三ノ中。大將オノ

玉フさうとくのもとよより給ひて布のりある穴よりのぞき給へバ云々涙もこがれて

ほそさあをよりいとぐとえせなりぬ

○さうとく(源浮舟)廿さうとくをべきことかど云々むつまーくおゝろやす死ま

まよの給ひつたりぬれば

○さうとく(源総角)十さうとくまでおくり奉り給ひて(同空蟬)七此さう

ト口よまろいねたらん風ふき通せとてたゝとひろけてふせ

さうト 精進(枕)二、さうトの日記おこかひ(うつほ 國讓)上、五内よりさうトの御着て心ことよいときよらよて御みき参り給ふ(榮玉の臺)七、御くごものさうトものもてつゞきまゐりたれば(源 溥標)卅、二あそれようちかめつゝ御さうトよてとすおろしこめておこかせ給ふ(蜻蛉日記)とみかといへどわれはさうトあり(源あふひ)四十、さうトよて日をふるけしや

○さうトん(源すま)廿、やがて御さうトんにて明くれ行ひておそを(釋氏要覽)廿二、十誦律序云諸大德爲道之故當一心勤精進所以者何諸佛一心勤精進故得阿耨菩提何況餘善道法侍中群要)大盤間、又御精進之間不用魚味但稱差物密々有此事雖然隱便又以例也

○さうトもの(土佐日記)ふあぎみせちまはさうト物おければ午の時より後よ云々(源 見の奇)上ノ、廿九、御あるトのことさうト物よてうるまゝからまめりくせさせ給へり

○補 さうトいひ(大和物)六、よるひるさうトいひをしてせけん神佛よごんをさてまどへど音よもきこえせ(うつほ 忠こそ)廿九、いひさうトを給ひてたゞおそよあひまんとのみおこかひ給ふ○文雄云さうトの精進の字音いひいひをの

べたる語よてもとおあト事をいふがおのづから事よつよくいふよなれり俗よ重言かといひてひが事のやうよ思ふのへりてひが事也○廣足云詞と字音と同事を重ねいふ中古の例隨筆よおほく出せり

さうー 草紙(枕)二、さいでのおーへされてさうーのかりにありけるをまつけさる(拾)上、雑、つりさ給えらでかけき侍りたる比人のさうーか、せ侍りけるおくよりきつけ侍りたる 貫之

○さうーのつま(源 見の奇)上、一、うちぎ姿よて立給へる人あり云々、紅梅よやあらんこ泥うはきまきくよあまさかさなりたるけぢめをかやりよ双紙のつまのやうよとえて櫻のおり物のををかが成べー

○補 さうーあせ(金葉)冬、從二位藤原親子家の草紙合よ時雨をよめる 顯季、ざうト 雜事(源 帚木)卅、さるべからん雜事、うけたまをらんと(同 浮舟)七十、殿よめし侍りしうバ云々、雜事とも仰られつるついでよ

さうー 曹司(彈正式)三、先參朝堂後赴曹司(文粹)七、三、東西曹司之祖宗(源 夕かほ)廿四、別納のりさよぞさうーかどちて人をむべりめれどこおさのまをれたり(同)廿八、火あやふーといふくあづりりのさうーのりたへいぬるかり(宇治拾)廿五、五位いまた

あき侍らむといへを云々さて四五日をりありてさうしをよてありける所へと
しひときていふやう(源 若紫)四十めのといさうしをよてさふらひかん(古) 哀藤
原のといもとの朝臣の右近中將よてを侍りけるさうしの身まりりて人もをまむ
かりよなるよ云々(源 榎柱)卅 大將のつりさの御さうしをよておそしける(同 桐つは)
五 後涼殿よもより侍ひ給ふ更衣のさうしをほりようつさせ給ひて(白文)十五寂
莫曹司非熱也(補)北山隨筆御曹司、大學寮よ東西の曹司あり管江の二家これを司
りて人を教る所かり此大學の南よ勸學院贈太政大臣冬嗣 所立藤家の學校を立て南曹と申ける氏の
長者むねとこの院を管領を氏の長者の公達此曹を司り給ふべき御方を貴稱して御
曹司と申よ(伊勢物)七十ある人のとさうしをよてまへのとぞよをよりしを石ナリ
○さうしをよ(新猿樂記)寢殿渡殿曹司町

さうト(請)源竹川(四十)けふの光とさうト奉り給ひけれとおそしませ(同 うき舟)
五十 山の座主只今さうトよつりおさん(同 あふひ)廿 山の座主何くれの僧さちもえ
さうトあへ給む(同 はし姫)卅 あざりもさうトおろしてさかといせ給ふ(竹取)
髪あけなどさうトて(同)ともあれかくもあれ先をさうト入奉らん(沙石)八上西大
寺の思圓房の上人をさうト(請)

さうト(空穗 藤原君)十 父大將よこひさうトみよこふよ女も大將も今ようけひり
せ(同)廿 ゆめけしきとをあてこそをさうトと思ひかしてあれとの給ふ(古
事記) 二 其神之正身トアリ(令義解)五(三代實錄)十(万)十六 味飯乎水爾釀成云々右
傳云昔有娘子也相別其夫望戀經年爾時夫君更娶他妻正身不來徒贈裏物因此娘子作
此恨歌還酬之也(式部式)九 當番人正身參省(源 帚木)廿 さればよとよろををり
せるよさうトみよな(落窪)四 いりぐのたまふとさうトみよきりせ奉り給へとの
給へば(古事記)中(四)後人注 正身(源 末つむ)十 六 さうトを何のこゝろけさうもかく
ておそし(古事記)下 二 雖報其功滅其正身(落く)一 此月ころあこぎよをむと聞
おもひつるよさうトみよたらかへりけり(同)一 さうトをよおろりならせいとト
き事をかき給ひて

さうび(源 柳)四十 ちのものとさうびけしきむりされて(榮 玉の臺)七 そのもと
よさうびやうたんからかてし(古)物名 一 我のけさうひよを見つる花のいろを
あたかる物といふべりけり

さるたづま(後拾)春下 一 野へこればやよひの月此もつるまでまたうらわりささ
るたづま(さい)出 部よ

さるくく(源初音)二十ひかりもなくくろきかいねりのさるくくくたりさるひ
とかさね(花鳥)さるくくくいさやくとあることろなり○眞淵云万葉珠衣の
さるくくとあるの鳴音をいふ(万)四ノ十五「さまぎぬのさるくくづみいへのいも
物いもきておもひのねつも(同)十四「ありぎぬのさるくくづみいへのいも
ものいもきておもひぐるも

さのこと死(源舟)六十さのこと死ひトやうのことのさふらそんをばいりてりう
け給ひらぬやうの侍らん

さのこ(源空蟬)三 いうからんとおせとさのこもえおせのどむまトかりければ
(古) 誹諧「ねぎ言をさのみ聞けん社こそとていなききの森となるらめ(山家)上

「うきふしをまづおもひする涙りかさのこそのいとあぐさむれども(續古)秋上
臣「あぐめきてされみ盡せぬ涙とも老てしりぬる秋のよれ月(新後)戀三「なぐさ
むるわがあらまし待なれてさのこねぬよの數やうさねん(續干)戀五「これを
かりさのこおもふもかひぞあさけよつらくなる人のこゝろは(同)同前齋宮「わす
れゆく人さかりこそつらからめ身をさへさのみ何うらむらん(續拾)戀一「おもひ
らね猶世よもらせいらせんさのみ涙のどがよなすても(新續古)戀五「つらから

さかれなであまのさのこかど身をうらなまし袖ぬららん(續後拾)戀二宣「さの
みよもむくいあらトうき人の心よりこそつれあかるらめ(新古)戀三般富「何り
いとふよもあがらへトさのみやうきにたへたる命をるべき(新續古)戀四「さの
みやうきにとへんうき草のねもえぬ人をおもひたえあで

○さのみぞある(宇治拾)六 家綱おもひけるのそりられたるはよくけれどさてのこ
やむべきはあらせとおもひて行綱にいふやう此事さのこぞあるさりとて兄弟の中
さぐひもつべきはあらせといひければ

○さのこを候(宇治拾)一 櫻のそりあきものよてかくそをくうつろひて候なりさ
れどさのこぞさふらふとなくさめければ

○さのみこそ(源をどめ)四十 母はおくる人ほどくよつとてさのこを哀れ
かれ(サキコ)ノモ ○補(頼阿)「まぢをいむ心をさのみつくはりあうき世や花のい
ろとあるらん此哥さのこといふ詞のつらひ様あやまれりよべて此詞のさのこ心を
つくさぬ或のさのみ心をなとつくはらんかどこそいふべければさのみつくはりあ
どいひがたき詞也戀部忍絶戀「なぐらへぬ契の後ぞあられけるさのみつゝみ
人の心の此さのみも誤れり此ついでよいそん大りた今の世れ哥よこををるよた

近世の哥をのこ手本として古き歌の心をとめて見ざる故よりやうの詞かどの次第
 はあやまり行ことをもえさとらば三百年來の哥の殊に古へまたがひて誤れる事
 おほし然るをまれくは哥よくしれる人ありて其誤をたゞはをば都てそねえてい
 ふやうあやまりながら先達のむねを用るが哥道のからひぞ當代の風よりたがふぞ
 かと、いふいと心得ぬ事也誤とちりながら用ると當代の風はまたがふとの事お
 よるべしさやうは一槩に心えて先達のひがこといへるをもとゞさむ其まゝ用るつ
 つ人のよきこといふをを聞入せしめてひさすら家の掟をさへ守りてよめばあしき事
 かしとおもふの甚愚かる事也もしさやうにのこかしく心得て古への哥と考へ合せ
 て是非をたゞは事もせむ世のうつりゆくまゝは覺えぞあらむひが事のみおろく
 なりて終りの其手本よれる人の哥もともよえもいとぬ俗意俗風より下りゆくべし其
 時よ至りても猶其家の掟を守りてその當代の風をのこ用べきよや今迄をせんと次
 第に誤多かり來ぬることをさとりて今より後も又おせんと次第に誤おほくなり
 ゆりむ事をおしそららば我いふ言のむかしからぬをおもひあるべし

さのもの(源葵)卅五絶間とすけれどさの物とありたる御文あれはどがかくて御覽
 せさせ

さく 避(源 帚木)四十人々さけむおさへさせてかん聞えさせよ(同 紅葉賀)三 御との

るかどよもこれりれとあまたおまゝのあたりひきさけつゝさふらせ給ふ(頼政
 集)下「まどろまばおどろりはなよあふとん夢も中をさくとおもそん

補さく 放。フリサケミルノ(万)五「あまはづはづは御舟もてぬときこえを紐解さけ

て立そりせん(同)十七「あまざりるひかよあるこれるうたりさもひもときさけ
 ておもはせらめや(同)「家にしてゆひてしひもをときさけむおもふころをたれ

りいらむも(同)十二「こまよしき紐のむせびもと死不放いもひてまてどあるしか
 きりも(同)十七「かくのみやあがこひをらむぬをさまのよるれひもたよと死さけ

せして(同)三「問さくるうからはらならなき國よこたり來まして(同)五 石木りも
 とひさけいらせ(同)九「かさりさけ見さくる人めともしと○鈴屋翁云放ハ情を遣

るといふ遣は同トくて人と語らひて思ひむせなる、心を放遣る也(續紀)寶龜二年
 詔語比佐氣

さく 裂(神代紀)上ノ割裂其尾視之

補さく (宇治拾)三湯ふねよさくとのけさまよふれことを

さく 咲(万)十二玉りつら花のみされて(同)八ノよひぬべくもさける萩りも(源

夕霧(廿)かのちろくさけるをかん夕ぐすと申侍る(同 あふひ)卅りんたうなて(こ)かの咲出たるををらせ給ひて(土佐日記)けふうみのあらけよていそよゆきふり波の花さけり

○さねとどめ(源 手習)廿をとかへ桔梗かど咲とどめたるよ(古)上春人の家ようゑとりける櫻の花のさきとどめとりけるをみてよめる

○さねよふ(源 総角)六十「櫻こそおもひいらせれ咲よほふ花も、ちぢもつねおらぬよを

さく(簫(源をとめ)六心のまゝある官簫よのやりぬきバ

さく(笏(和名)十笏、四聲字苑云笏音忽俗手板長一尺六寸闊二寸厚五分也

○さくそう(笏拍子(天徳哥合記)みか笏拍子とれり(源をとめ)廿おとゞのそうーおそろくーからせうちならし給ひて河花ノさくそうトアリ

補さく(うつは 藏開)上、一さーぬきかろーかどをひきさけて

さくそち(和名)四律書樂圖云尺八爲短笛サマニハテ縦向吹者也(源 すすつむ)廿大ひちりささくそち

さくり(狹)卅下云々さくりもよよとひこれをいふよやとよめるよ(榮うらく)五十

又いとゞーきをみたさくりもよよあり(和名)三病類、噓噓佐久利逆氣也(宇治拾)

五此と一頃の侍さくりもよよとなく(榮とりへの)廿うへのさらし御こそをよませ給そぢちこどもかどのやうよさくりもよよとかりせ給ふ(蜻蛉日記)中いそとら

さくりもよよとあきて(狹)四云々どあるを御らんといづるまよさくりもよよととたれがそしき涙のけしきを

さぐる(古)物名「かづけどもなみのかりよいさぐられて風吹こどようたーづむ玉(宇治拾)九此をどこさぐりてあやーとくるめくよ(万)四、五「夢のあひのくるーのりけりおどろきてかささぐれどもてよもふれねバ(源 帶木)四あやーくてさぐりよ

りたるよぞいみとく匂ひとちて(竹取)十つさくらめの巢よ手をさー入させてさぐるよ物もなーと申時中納言あーくさぐれバかたありと腹たちて云々手をさへけて

さぐり給ふよ云々(源夕のほ)廿のへり入てさぐり給へバ(同 東屋)卅何事ぞとてさぐりよるようちぎ姿かる男のいとかうをしくてそひぶーさまへるを(拾)哀よみひ

(万)二十「うつくーとおもひーいもを夢よ見ておきてさぐるよあきぞかかーき(神代紀)下ノ探其口(同)上以天之瓊矛指下而探之(和泉式部續集)「とが袖にくらき夜

中のねさめよもさぐるもゆるくぬれよけるりか

さくごん ハツカサ(古)序 さきのかひのさう官おそしかふちのまつね

さくらいろ 新古(春下)定家 「さくらいろの庭は春風あともあしとまぐぞ人の雪とたよ

見ん(拾員)上 「さくら色のうつるもいらぬ山がつもこのもれ花のそでまちりつ、

さくらをのをふ(六帖)六上 「さくらを此をふの下草露一あら^れありてゆけん親

のちるとも(万)十二 「櫻麻のをふの下草をやくおひさいもがいた紐とけざらま

を○契沖云櫻麻といあさのををよおひ立たるが枝葉さへ櫻よたればそよや又

櫻のさく頃麻をまけば櫻麻といへりといふも一説也亭生いたゞ亭をまける所也名

所よあらぞ○眞淵云さくら麻と訓されど六帖はさくらをとあるをよいとををふと

かさねん詞なればありさくらといふ所より出る麻あればちりいふり且櫻といふ所

の尾張近江下總かどよ昔も今もあり

補 さくらがり (拾)春よみ人 「さくらがり雨のふりきぬおなとくばぬるとも花の

かけよりくきん(新拾)春下入道二 品親王性助 「春雨のひかぎふる野のさくらがりぬれてぞり

へるを染の袖(新續古)春下 實方 「さぐはかく大原やまは櫻花かりよあらでちを

見しりか(和泉式部集)おち道かる寺よ入て見ればこの花のさかさりければ

りたり僧のありしをととれるもかければ「さげぬらむ櫻がりどてきつれどもこ

の木れもとよあるとたよか(壬二)中 「さくらがりちをさしかけ見むそ鷹の野守

のかぐみ花もうつりぬ

補 さくらたひ 櫻鯛(山家)下 「霞くかまの初花をりかけてさくら鯛つるおきの

あま舟

さくらくさ 櫻草(平家花そろへ) 丹波少將成経のうへさくらくさともしをまそ

さくむ(祝詞)盤根木根佐久彌氏(万)二ノ石根佐久見手補(万)廿ノ伊波彌左久美豆

布美等保利(同)十六浪の上をいゆき左具久美いそのまをいゆきもどはり

補 さくく (宇治拾)一ノ ちろくあさらしき桶よ水を入れて此釜どもにさくくと

いる

さくさめのとと(夫)卅五(現六)「我せこよ年のかむをもちあらとさで猶よりゆてふ

さくさめれとと(後)雜四 女母 「今こんといひしをりを命よて待よけぬべしさくさ

めのとと○袖中抄よ此哥をあけて能因歌枕よのちうとめをいふといへりそれから

せ古き臆腦どもよもかくかんいへり 零下

さくとり(狭)四上 文ノ いづくへぞたべ見んとこの給をそれどうちさくとり引 まい

いかにい給をせ(源をとめ)廿宮よあづは奉りさるこころやをなれといとさくとり

りおよそけさる人立まどりておのづからけぢりさもあいなきそよなりよければ
かんと聞え給ひてよそりにこさし聞え給ふ(落窪)一いづら櫛の篁のありつるのあ
こぎといふさくとりをりてそやうとりかくしてゆりとのさまふもあるくこよと
りておき侍るといへばさそがよのこひとらぞ○宣長云コマシヤクレといふよよく
あされり

補 **さや** (詞花) 雑下 國基 「雲のうへの月こそさやよさえとたれまことゞこる物や何
なる

補 **さやる** (万) 卅八 「まべもなくくるしくあれば出そりいかにと思へと子らよ
さやりぬ

さやり ハツキリ (万) 卅五 「むら鳥此朝さちいよ君がうへのさやりよきよつ思
ひいでとく(源 空蟬) 五たどいべかく口おほひてさやりよもとせねど(同 竹川) 十ゆ
ふくれの霞のまぎれいさやりからねどつくくと見れば櫻色のあやめもそれと見
こきつ(同 紅葉賀) 初 入方の日けさやりよさしるよ(拾) 夏よみ人(六帖) (躬恒

集) 「そこさよみあがる、かそのさやりよもそらふることをかこいさきりかん(同) 下
八卅 「五月雨の夜にくらくとも郭公さやりよよもなきてこぬりか(六帖) 二(忠岑

集) 廿(新古) 羈 旅 「あつまぢのさやの中山さやりよもとえぬくも井よ世をやつくさん
見ぬ人もあに(信明集) 廿 「けふをける雲の衣もうへかれやさやりよ見えつ今朝
戀や見たらん(六) 六 「秋さぬとめよいさやりよ見えねども風の音よぞおど
ろりれぬる(仁徳紀) 十 其聲寥亮(應神紀) 二十 天皇異以令作琴其音鏗鏘而遠聆(源 空

蟬) 六 さやりあるいとそいながらひさしう見給へまほしきよ(同 紅梅) 五 母北方こ
ごよさやりよいをさしむりひ給とぞ(同 帚木) 十 またさやりよも見ていぐ
かどそべなくまたせ○契冲云日本紀よ寥亮ナサヤカトヨメリ万葉集ニハ清の字ナ

モ書リサヤトノミヨメルモ同シ鏗鏘ナサヤカトヨムハ金珠ナドノサハヤカナル聲
ニテ別義也サレド和語ノ心ハカヨヘリ

補 **さやつりのま** (金葉) 雑上 俊頼 「かさかけよかけゝるたちもあるものをさやつり此
まよわそれとてぬる

さやう (源 桐つは) 卅一 藤壺の御ありさまをたぐひかしと思ひ聞えてさやうから
ん人をこそとめよるものかくもおそしけるりな(同 帚木) 十 さやうからんたちろき
またえぬべきわさなり(同 末つむ) 三 はかけのみざれたりよさまい又さやうよても
みまろしくおそを(同) 十一 いでやさやうよをりしきりこの御りさやとりよいえしも

みまろしくおそを(同) 十一 いでやさやうよをりしきりこの御りさやとりよいえしも

やとつきなげよこそとえ侍れ(枕)十一さらばもよまたさやうのものをさきりあらめ
たるよとの給のるよ

さやぐ 契云サワグ(万)廿四篠ノ葉の佐也久霜夜サヤクハ風ニ(空穂吹上)十一「か
トオナヲ

くれぬの草葉もさやぐ風をさへ松のひびきよいりぐとへん(六)(古)十九「さ
りいらよ夏の人まねさゝの葉のさやく霜夜をこれひとりぬる(古事記)中このさ

やぎぬ 木ノ葉サヤク(万)十九さゝの葉のさやまもさやよさやけども(同)十八あ
ト鳴リサワグ也

いべある萩の葉さやぎ(延喜式)八大殿祭佐夜岐(金槐集)上「さゝのさゝあられさ
やぎてみ山べのみねのこがらゝさきりて吹ぬ(古語拾遺)阿那佐夜憩竹葉之(古事

記)中うねび山許能波佐夜藝奴加是布加牟登須(同)中風ふりむとぞ許能波佐夜牙流
十

補(新古)冬攝政太「さゝのさゝみやまもさやよ打をよぎこられる霜をふくあら
りか(續拾)冬

りか(續拾)冬 基綱「篠の葉のさやぐ霜夜のやまかせよ空さへこゆる有明の月

○さやぎ (古事記) 卅七 豊葦原之千秋長五百秋之水穗國者伊多久佐夜藝豆在祁理

(日本紀)聞喧擾之響焉此云左柳寛利奈離

さやけき 一ノ(万)廿六 いるまどろたひ見るよさやけい(六帖)六(古)春下「久方れひ
の(古)

りりさやけき春の日よづ心かく花のちるらん(續後拾)秋下「秋の色ハ千種かぐ
是則

らのさやけきをたれりをぐらの山といふらん(伊勢集)六(六帖)下「霜雪よきえて
うき身のいづくおを袖たれぬまでさやけかりけれ(元輔集)九一月かけのいさらぬ
さえの(六)

庭もこよひこそさやれかりけれ萩のいら露(源末つむ)十 またる、月の心もとを
凡星の光をかりさやけく(万)廿五 佐夜氣久おひてきまよその名を

さやぐ (應神紀)ふれたつかつの木古事記ナシのさ佐柳々々(著聞)十四 さうめささる人の
さやぐとてまゐるおとしけれ

さやめく (平家)廿四 小松殿えがしをすし大もんのさゝぬきのそバ高く取てさや
めき入給へバ(同)廿八 數千騎ありける兵ども入道よいかうとも申も入さやめき
つれて皆小松殿へぞせたりける

さま(源 帚木)廿こよひをりど待たるさまかり家さま(宇治拾)十 家さまよゆく
どよ西さま(源 蜻蛉)四十 おまへをあゆみこりて西さまよおをするを(そいさま

(狹)三下 御ふところよねたりける猫のおきいで、そいさまよ出るつかよひりれて
云々長さま(枕)十七 其うしろよいたゝとひとひらを長さまよへりをして(そつせさま

(蜻蛉日記)中、云々 まうでつきてみてぐら奉りて初瀬さまよ赴むく(外さま)狹)三、
下

四ノ聞ちりがほよ外さまへもいりせ(そとさま)續古)戀四本「そとさまよなびくを
院侍從

増補源氏物語 卷之四十一

十五

いさや

さまよーたぐひて(源 柏木)十人けきをまひのつきかりるべきをさるべき山ざと
かどよかけをかれたらんありさまも又さけがし心ぞそりるべくやさまよーたぐひ
て猶おぞしそかつまどくなんと(同 早蕨)十さまよたがひてあゝろをばあれそて
トどかんおもふを

補さまよもおそぬ(散木)「秋さぎの末葉のつゆよなづさひてさまよもおそぬをり
ころもさつ

さまりへて(源 夕のほ)廿かりくさまりへておぞさるゝも御心ざしひとつのあさ
からぬよ(同 玉のつら)十さまりへたるものゆふぐれかり(千載)源清雅九月を
かりよさまりへて山寺に侍りけるを(源 桐つは)七とづりらゆひ給へるつらつき顔
のよひさまりへ給せん事をしけかり(同 神)四なりよさまかそりて見ゆ

○さまをりへて(源 帯木)十りんどのもてあそび物の云時まつれつゝさまをかへて
さまかたち(源 葵)八めもあやがる御さまかたち(同 紅葉賀)四目もあやなり御さ
まらたち見給ひ志のされやありけん(同 桐つは)九さまかたちかどのめでさか
りしこと

さまがら(うつろ 祭の使)五十侍従の君と御であそばすをりなりしりばかん侍従が

さまがらよやありけんあそれ手つきおもひやられてもあそををさるるか

さまよく(源 あふひ)廿あき給ふさまあそれし心ふりき物からいとさまよくあまめ
き給へり(同 朝顔)十さまよきはとよおのこひ給ひて(同 総角)十さまよくこーら
へ聞え給ふ(同 手習)七さまかそり給へらんさまをいさゝり見せ給へよと少將の
あまよの給ふ

さまよふ(万)廿五春鳥の佐麻欲比ぬれば(源 竹川)六見えあらがひさまよふ(同 夕
のほ)初さちさまよふらんおもつりとおもひやる(同 榎はしら)四近江ノ君いろ

めりしうさまよふ心さへそひて(同 竹川)廿むらりらの君たちの内よ参りさまよふ
よ(好忠集)十二月(夫)十一とつ川よしの瀧をわけゆけば氷ぞ泡とうきてさま
よふ(補 万)廿八憂吟比(同)廿七己恵乃佐麻欲比

さまさぐ(妨 持統紀)廿妨於農時(源 椎か本)十さばかりの事よさまたげられて(狹)
四上かまかりし思ひたち給ひふけれつひよはえさまたけ聞えトかとおぞあり
ぬれど(源 わかき)下九とくおぞたちよ事かれど此御さまたけよりづらひて
(落窪)三かくさまたけたるやうよてこしーたるいと物し(源 あふひ)十あるまどき

事などもさまたけ聞え給もせ(狹)三上ひとすら身をさきものよか侍らんと思ひ入侍り一海の底をもさまとけて此山里ニ尼ありてせさせ侍りつるを云々

さまたけ(狹)四上ノ不孝の御心よてのおぞしてつらん道のさまたけイナシよもこそあり給へ彌拾雜春「おもふことありてこそゆけ春がはと道さまたけイナシよ立かかくしそ

(万代)雜六良印「行末ぞ身のさまたけ成ぬべきたのめばこそはそむりざるらめ

さまことある(源 若紫)卅 さまことある夢を見給ひて

さまでサヤウニマデハ源やとり木六十さまでいりり(同 玉葛)卅たれをりりとりおぞゆ此君との給へいりりでりさまでいと聞ぬれを(同 夕顔)六さまで心とどむべき事のさまよもあらせと

さまでもシカ迄モ左様ニハナク源東屋初 たびくそのめりおこせけれまめやう御心とまるべき事とも思ねばたゞさまでも尋り給ふらんことをり

(同 あふひ)六 かの殿のさまでもおぞしよりざりけり

さまあくき(源 玉葛)九 いとぞけれと又どりかへんもさまあくこづらていけきを(同 桐つは)九 さまあき御もてか故こそけかうそねと給ひぐ(同 蜻蛉)卅氷のかいらようちおきむねよさあてかどさまあうるる人もあるべい

(同 末摘)十 心もさまあからんかどさへ中將のおもひけり

さまと(榮 楚王の夢)卅 此のさびもなさまといふあり源ゆふ顔十 御心のうちおぞしいづることさまとあり同(源 木)廿 此のさまとのよさかぎりをとり

ぐ(千載)秋上攝政前右大臣「さまとの花を宿ようつうゑつ鹿の音さをへ野べのあき風(源 源木)四 かくさまとあるものどもこそ侍けきとて(同)九 さまとの人のうへぞもをりたり合せつい

さまとサメノ所ニ出ス

ざけ(邪氣 空穂 國讓)上ノこれき物とせ侍ればざけなぞ申させんなど行せ侍れど猶心もとなきをさ今のあらせれたるやくいはとけよこそいとてかん(源 源)六ざけかどの人の心たぶらりてりるりさまをむるやうも侍るる

をとて(古事談)二 御堂令煩邪氣給時小野宮右府爲奉防令參給邪氣聞前聲ト人云賢人ノ前聲コソ聞ユレ此人ニハ居アハレシト思フ物ヲトテ(源 浮舟)四 五十例の御ざけ

の久くおこらせ給もざりつるをおそろしきこさなりや山の座主只今さうトにつ

りもさんいそがいけよてさち給ひぬ

補さけ(宇治拾)一 越後國より鮭を馬よおせて甘駄をりり

補 さけたづね(著聞) 十女のひとりありつるをば酒さづねよりて
さけたて(宇治拾) 八 おそくゐてまゐるといまいめいへばそれを聞てさけさてゝ
ゐてまゐりぬ

さけのけ 酒ノ氣(空穂 俊蔭) 卅 見給ひやうは皆人酒のけありてさうき人もあり
りかバ君のとまり給ひけんもあらせ

さけのみ 酒飲(伊勢物) 八十夜一夜酒のこゝあそびて夜あなもてゆくぞと(同) 六
九よひとよ酒のこゝければもたらあふこともえせで(うつは 田鶴の村鳥) 二十 ゐん
つくり酒のみしてありつれよりへる **補** (伊勢集) 紅葉ちるま酒のみいたる所

さけおび (寂蓮集) 「下帯のむせぶ氷は手をかけてそらまぞうつる弓むりの月初句
の帯と夫木おアルハ誤ナルベシ也
ノ部下の帯引哥ノ所ニ書ッヘツ

さけぶ (古) 猿山のりひよさけぶといふ事を題よて 云々(堀次) 猿 仲實 「夕つく日さ
はや嵐の山もとよものこびいらは猿さけぶあり **補** (後拾) 秋上 長能 「宮城野まつまといふ
鹿ぞさけぶあるもとあらの萩まつゆや寒けき(散木) 「ゆふぐはれけとよすさく
くつこむいおびたゞくも戀さけぶありあ(宇治拾) 卅 かるほどよもの高くいふこ
ゑは何事ぞとさけぶをのこのさけびていふやう(同) よべさけびい 云々(同) 二七

いりりへりてさけびいふやう(同) 六ノさけびのゝしる
さけあま(夫) 卅(新六) 二衣笠 「黒髪(のいろ)のかそらぬさけあまのまことのすぢよ
身(の)なびきつゝ

補 さけをゝむ(著聞) 十二、さるよても入給へ酒をゝめんといへを
補 さぶり(宇治拾) 十一、西よむりひて川よさぶりと入るどよ

さふる 障(夫) 九 俊兼 一日をさふる夕山松の木此下よをみづをがれてなつぞをくあき
(新續古) 雜上善 節法師 一日をさふるからのひろともりかへておぬ秋をゞもりのおた
りせ(延文百首) 納涼 一日をさふるからの下陰さちよればまたきよあきのかせりよ
ひけり(十訓抄) 廿八 障子(の)子をさふると書て候よひろくあきて候ひつれば御座を
りぬとの存候 **補** (玉葉) 夏入道二品 一日をさふるならの廣葉よかく蟬のこゑよりそる
る夕立のそら

さぶる (うつろ) 菊(の)宴 上ノ「百敷よさぶるをとめの袖のいろも君よをめねばいり
がとぞとる

さふらふ (江次第) 卅三 大舍人候哉刀禰列候哉式部彈正候哉國栖候哉(枕) 十二から
いめを見さふらひつる誰よりいれへ申さふらんとておんと 云々あからさまよ物

會 補 雑 類 集 卷 之 四 十 七 十九

へまくりたり間よきたかく侍る所のやけ侍りより日頃のがうかのやうよ人の家よ尻をさし入れてあんさふらふ云(源若紫)四十こなよは女あともさふらとざりけり(枕)廿三ノ雪山后いりにと問せ給へ清む月の十五日までさむらひおんと申を(同)廿九あそあさてまでも候ひぬべしろく給もらんと申すといへ(同)四ノ清木守此雪の山云々十五日までさふらもせよく守りてその日よあたらばめでたきろく給もせんとせたくしよもいとよきよろこびいもんかどかさらひて(同)廿一ノ常陸かどりこと物もたべざらんそれがさふらもねばこそとり申侍れと云き(同)廿六つゝむ事さふらもせの千歌なりとも是よりぞ出まうでこましと啓しつ(万)廿五大殿をふりさけしつゝ鶉か伊波比もとり雖侍候佐母良比不得者(神代紀)上ノ手力雄神侍磐戸側(源常夏)初中將の君もさふらひ給ふあたらしき殿上人あまたさふらひて(枕)十八こきでんとは云々其御方ようちふしといふ者の娘左京といひてさふらひけるを(同)十八后内へ入せ給ひぬれば七日までさふらひていでぬ(源やとり木)五十よろしきまうけのものどもやさふらふ(同)五十あどとととさ用よも侍らせさふらひんよあたがひてとて(同)浮舟)六十さのとき非常の事のさふらもんをばいりてうけ給もらぬやう侍らんとかん申させ侍つる(枕)十一

高遠帝猶高うふりせおとませ生昌清おほ其事申侍らんをこよさふらもんいりよといへ(竹取)二十御門ノ是をらんとおぼして姫の迹て入る袖をとりておさへ給へおもてをふたぎてさふらへどと下めよく御覽つれを云々(竹取)四翁みこは申やう詞いりなる所より此木のさふらひけんあやしくうるそくめでたき物よもと申は(枕)十一生昌詞姫君のお前の物云々ちうせいをささちうせい高つきよてこそよくさふらひめと申は(源浮舟)六とあらたまりて何とりさふらふ(古事記傳)十四侍の佐母良比那牟と訓べし佐母良布の佐の眞の意母良布の母流を延たる言にて母流との何事よまれ心をつけて伺ひ考へ居るを云委しき事の本書と見るへし
○さふらひ侍らん(源浮舟)十一人のちり侍らんといたゞ御供よさふらひ侍らんこそ
○さふらそせ(源浮舟)十時方句宮いとあらし山をえよなん侍れとことよと遠くいさふらひをかん
さふらふ伺候(源桐つは)初女御更衣あまたさふらひ給ひける中よ(同)四ある時よいおやどのでもりをぐしてやがてさふらもせ給ひける(同)五清涼殿よもとよりさ

なれよ

さこそいへ(源あかし)七 ひねもまよいりもまつる風のささぎよさこそいへいたう
こうト給ひにけれバ

さこそい(枕)八、うらやまよき物、琴笛からふよさこそいまどよきほどりれが
やうよいつりくと覺ゆめれ此詞の詞の玉緒はし廣足考も有

備さこく川蔭云六帖「春の來てきのふそりを淺とどり色のさこく野の成り
けり「春雨にめそゆふら一花よけさこく色見えて咲ちよけり「秋の野のねこ
よこしてもてぬともいそほのたねのこーやのせぬ標注云さこくいりある花と
もーりがた一新撰六帖のころも其さまいられざりけるよや此二首の哥につきてよ
とたるやうよとゆといへり今按さこくの字音よて釵斛あるべくおぞ一本草啓蒙石
草類の石斛云センコク州釵斛醫級云々山中岩石上よ生る莖の木賊の如
くよして細く黄綠色寸餘一節節ことよ一葉を生る形竹葉よ似て小く厚く光あり莖
長さ三四寸多く叢生に夏舊莖の節の下よ二花並生に形白及花よ似て白色又彩紅色
ある者あり紅色あるの稀かり筑前土州よ淡紅花あるものあり形細くよて穂をか
いて生る其根樹皮よ生す石上よかよともよ花後實を結ふ蘭莢よ似て小かり九州地

方よ生るもの莖長く葉花もまた大也云々と見え大和本草よ本草を引て石斛々々

石草類有之曰如竹而節間生葉開紅花節上自生根鬚折下以砂石栽之或以物盛挂屋下
類ニ澆以水經年不死正字通時珍曰石斛名金釵花此草狀似之釵故名云々と見えて和
名抄よ石斛本草云云々胡谷反和名須久奈比古乃久須禰一云以波久須利といへるも

の也此草實山中岩石上よ生るれば前よひけるいそねをのこーやのせぬとい
へるよもよくかかひてさこくの決かく此草なるべくおぞ一記なりされば我肥後國

よての字音よ石斛といへるもの也草木育種にの事物紺珠を引て鳳尾蘭とて出せり
さえ(源)少女六文さえまねぶよも(同)桐つば一弁もいとさえかよこきそりせよて

(同)浮舟卅さえなどもおぞやけよよき方よもおくれをぞおそよべき(同)東屋四
さえありといふ方の人よゆるされたれと備(同)ととめ六猶さえをもとよてこそ

やまとたまよひの世よもちるるよりたもつよう侍らめ
さえ(哥)空穂織開下二さえともよ心よよほそながひとかさね袴一づよかづと
云々かくてよかざえなのりかどすあるトのおとよ仲よりの朝臣何のさえりもべる

山ぶいのさえかん侍る云々行、まさの朝臣何のさえり侍る筆ゆひのさえかん侍るい
でつりまつれ云々仲忠の朝臣何のさえり侍る和哥のさえかん侍る云々仲澄何のさ

えり侍るわたしもりのさえかん侍る(源 帚木)廿さえの死をまなくのそりせむづ
りく(同 繪合)廿さんひりせ給ふことなんいちのさえよて(同 をとめ)十まめやり
よざえふりき師よあづけきこえ給ふてぞ學問せさせ奉り給なる(同 帚木)廿無才の
人をまごろならんふるまひかどとえんよ(同 はし姫)八御うしろみのとりたてたる
おとせざりければさえなごふりくもえからひ給を(補 空穗 吹上)四かれがさえを
ばかりひとりごがさえをばかれよをへつゝ
(さえた)小枝(拾)雜秋よみ「かのみゆる澤べよたてるそが菊れあけとさえたのいろ
のてこらさ

補 さえかへる(新後拾)冬隆「あぐれつる宵のむら雲さえりへりふけ行風にあられ
降なり○廣足云このさえりへりの餘寒かといふとのことよていたくさゆるをい
ふなりさえかへりあよりへりかどのかへりよおなト

補 さえのかと(宇治拾)十五何事いひをるふる大君ぞさえの神まつりてくるふよこ
そあめれなとつおやきて

さえくく(源 若菜)下ノ。入道ノ願さむりかきたるおもむきのさえくく
くそりトくく佛神も聞いれ給ふべきことをあきらりあり

○さえくく(續後拾)冬鎌倉「雲ふり死太山のあらさえくくていこまれさなよ

霰ふるら(金槐集)上「月のそむいその松風さえくくてあら雲とゆる雪のあらし
ま(同)一更よけり外山のあらさえくくてとほちのさとよをめる月かけ(補 新古)

冬式子「さむしろのよその衣手さえくくて初雪しろ岡のべの松
内親王
さて(源 まつりせ)初かりくさてあけをかれぬ御ありさまのつれあきをみつゝ

(同 補)五十 かくひと所よおもしてひまもなきまつゝむ所あうさて入り物せらるら
ん(宇治拾)三云々 といへば扱いとやまき事なりけふもかこく参り候ひよ

けり(伊勢物)五 いけどもえあそでかへりけりさてよめる(竹取)九それおまめあら
んをのこどもをゐてまりりてあぐらをゆひてあぐてうかゞはせんよそらのつを

くらめ子うまざらんやいさてこそとらめ給おめ(同)同此つをくらめの子安貝の
あしくさむりりてとらせ給ふかり扱ひえとらせたまそト(同)十。中納言云々 それ

よりかんをこしうれしき事をばりひありといひひけるさてあくや姫形世よ似せめ
でたき事を御門聞召て(貫之集)廿八「とまごどひとをせのさてもあるべきよ物の

そとめよ歸るべしや(源 帚木)八あまが及ぶべきとあらねばかまがかまの
打置侍りぬさて世よありと人よあられさびしくあせれたらん葎の門よ思ひの外

よらうさけからん人のとぢられたらんこそ云(蜻蛉日記)上「久しとのおぞつりお
しやから衣うちまてかれんさてをくらせよ

【さて】魚ヲトル具也(新六)三結「おも川の、ちせまづけとさでさしてあゆふはふちをねる
のさげ子ぞ(神樂)コモ枕こもまくらやとりせのよとよや云々綱おろしさてさし
ざる(万)四「あまの山五百重かくせるさでの崎さでこへしこがいめよみゆる

(新古)戀五「これを見よむつたのよとよさでさしてををれしあづのあさ衣かは補
俊頼

(新續古)戀二、法印村基「朝夕よ淀の川長さいさでのさてこひかん後のよもう(万)九
十一二三河の淵瀬もおちせ左提さそよ衣手ぬれぬす子のあしよ(同)十九、長哥平瀬
爾波左泥刺渡

【さての】(源)夕かは五「あるべし隨身計さていかなむけよあるまどさわらむひとり
計ぞめておそしける(同)玉葛八此さのもし人あるをけ弓矢もちたる人ふたりさて
いおもかる物とらひかど三四人(うつろ)國讓中右の大殿よ對面せんさかんと申
よ奉れ給へさてい宰相よ云々つけよやり給へ

【さてどよ】(源)若紫廿七よとよもの御物思ひあるをさてたよやまかんとふりうおぞし
ころよ

【さての】(源)花の宴初こごづりひなど物々しくむくれたりさての人々のとあおく
がちよをさとりめるおほりり(空穂)樓の上五上さるべき大將たちおとゞをかりぞ
内よの句さての上達めい勾らんのものこよぞあるさるべき(元眞集)五哥云返し哥云
さてのあしよ男哥云々

【さてのち】(伊勢物)六十あそれがりて来てねよれりさて後男みえざりければ云々
三段

【補】さてのみ(續拾)戀一「袖の色をさてのみ人よあらせせの心よそめしうひやかり
らん

【さての】(新古)戀二、般富門院大輔「もらさそや思ふ心をさてのといえぞやましるのるで
のしがらと

【さての】(宇治拾)十六家綱おもひけるのよかられたるのよくけれど扱のみ
やむべきよあらせとおもひて行綱よいふやう此事さてのみぞあるさりとて兄弟の
中たぐひもつべきよあらせ

【さておく】(新古)戀五、俊成「思ひこび見し面影の扱おきてこひせざりんをりぞ戀しき
俊成

(新續古)戀五、般富門院大輔「たぐひなくつれかき人のさておきていける我身の恨めしき哉
門院大輔

【さてこそ】(源)夢の浮橋七云侍りつるよと申給へをさてこそあるかれとすのきよて
源夢の浮橋

さてありぬべき一源蓬生三 是こもさてありぬべき人々のおのづからまるり
つきてありしを同帝木十 おどろくくつくりたる物の心よまりせてひとき
人のめをおどろくしてとらよの似さらめとさてありぬべし

さてく一榮わか枝七 いちくよ申させ給へさいと心よううちゑませ給ひてさて
さてとどひきあえさせ給て源帝木廿 のこりをいせんとてさてくをりかり
ける女かなとすけい給ふを狭三ノ上三十八 こよいとあやしき忘れものありと高やう
よいふよねさる人おどろきさわぎぬさてく先うへのお前よ申さんとして立せり
て備宇治拾七 ありのまゝの事をかたりければさてくといひてとらふものもあ
り

さても一うつろ國讓中一 おとあしう目よとせく人の親よからせ給ひてさても宮
よのいりでつらまつらんと思ふ給べきを同中十三 親の物せられつる時こそさても
ありつれいりよ心をそくこびしからん源わか紫四十 晝の扱もまぎらそ給ふを
夕暮とあればいととろく給へ同柏木十 さてもあやしやわが世とよまおそ
ろしとおもひし事のむくいあめり同帝木九 なのめよさてもありぬべき人のそく
あきを貫之集下十六 續古 哀一 うけれどもいけるいさてもあるものをあぬるのこ

こそ身のみあかりけれ元真集四 「けふよりのさてもまぎかん夏衣えるより
うまき心とやみん同二詞花 春 「さくらをあらさで千世も見て一があありぬ
こゝろのさてもありやと補源わか紫十 さてもいとうつくしりつるちをりな小

よ云此さても俗言のさてものごと一山家上 「あくがるゝ心はさても山ざくら散
雅語にゆづらしきつらひさまあり
かんのちや身よかへるべき新後 戀二前一 「さてもまゝあそでさえかバ玉のをれい
くよをりけておもひみたれん同 戀三 冬三 「契しよかえるときくもつらりらせさても
とさるゝならひかければ同 同隆教 「あさくともこのみこそせめ泪川さてもあふせ
のかそりさてま同 戀四 基長 「さても又いりあるよその月かけようれおもかけをさ
そひそめけん續拾 戀五 後鳥羽院 「さてもあやおもかけたえぬ玉かづらかけてぞこふ
るくるゝよごとよ同 戀五 圓勇 「さてもあやかぎりあるよのならひとてうきよまけぬ
の命かりけり新後 戀一 前關白 太政大臣 「あられとをさても一のぶの松の露もりてなま
の袖よとえま新續古 戀三 崇光院 「人めよいままぬよあせとよもをがらさてもいま
いの鳥れねぞうき續古 戀二 通成 「中々よさても心の色みえバあふよのかへて身をや
せてま

さてもや源末摘初 すこし故づきてれこゆるわさりの御ととまり給まぬくまを

死よさてもやとおぼしよるをかりのけそひあるあたりよこそいひとくざりをもほ
のめり給ふめるよ(古) 戀五よみ「我ぞとくこれをおもせん人もがあさてもやう
死と世をこゝろとん

さてもありぬべ(源 松風) 十まさこまやりのあらねとすみつりばさてもありぬ
べ(同 玉のつと) 七かたちなどいさてもありぬべけれといとトきかたそのあれバ

ざ(榮 うちく) 四十水のみざと流きいづれば云々水つきもせいでさきて御腹
さるるれよるるれて例の人の腹とりもむらよからせ給ひぬ(同 月の宴) 五十ざ(

ととささけバおもせいとありくかりて云々ざとわらひのいりていたさおろい
さてまつりされバ(つれく) 五十あがきの水前板までざとかけりけるを(落窪)
二午の時をりりよ車ふたつ三四の君われやあとのいりて出給ふ云々 なのいり
てざとて出給ふ

さ(ガ) (日本紀) 十わりせこぐべき宵かり佐嗟餓泥能くものおこかひこよひ
る(も 古) 戀五よみ「いまよととびよものをさ(ガ)の衣よかりわれをた
のむる〇契沖云日本紀私記云蜘蛛之別名也一云其躰如蟹住左々原故云今按ちひさ
き蟹よ似たる心よて名づれたる(源 帚木) 卅「さ(ガ)のふるまひいるき夕暮

よひるまをぐせといふがあやかさ(散木)「さ(ガ)のいりよかゝれる藤をりまた
れをぬいとて人のりるらん(玉葉) 夏宮 内卿「あつがふくあやめれ末をたよりよてそと
りからふる軒のさ(ガ)

さ(ガ) (万代) 雜四 俊頼「草枕さ(ガ)が死うはさあいのやの所せきまで袖ぞ露けき
補 さ(タ) (續古) 雜下 太上天皇「さ(タ)のたけのさ(ガ)のほどのおもひ出よ志のされぬべき
一ふ(も)りか

さ(レ) (源 藤のうらは) 五さざとつりひさゝれたりけるをそやうもの給へどゆる
し給ふ(大和物) 一野大貳をともがささぎのときうての使よさゝれて少將よてく
たりぬり(後) 雜一かゝることいよさゝれよけること

補 さ(ヅ) (夫) 二 爲家「雪氷みなかと山よとけよけり小川のさなみさ(ヅ)れこえゆく
さ(ヅ) (六帖) (古) 賀「さ(ヅ)君のちよよまよませさ(ヅ)れ石のいそ布となりてこ
けのおふまで(古) 序 さ(ヅ)れ石よたとへつくをやまよりけてきとをねがひよ
ろこび身よすぎたのいそ心よあまり **補** (万) 十四「志かぬあるちくまの川此さ(ヅ)れ
しも君よふみてば玉とひろまん(同) 卅「さ(ヅ)れ石よ駒をさかせて心いたとあがも
ふ妹が家のあたりりも(同) 十九「さ(ヅ)川の小石ふみわたりぬを玉のこまのくる夜

の年よもあらぬり

さゞれ浪(土佐日記)「さゞれかみよけるあやをば青柳のうけのいとしておるりとぞとる(万)十七廿七 さゞれかみたちてもあてもこぎめぐり見れどもあり(同)十九

「どのぐもり雨ふる河の左射禮浪まなくも君のおも不ゆるりも

さゞれ水(清輔集)「もつせ川谷がくれゆくさゞれ水あさましくてもそとたる哉

補(續拾)戀一、後京 極攝政 「よは鳥のかくれもそてぬさゞれ水下よりよそんちたよをか

一(玉二)上 「霜がれのあさま見ゆるさゞれ水あらされてたよあそこりつ、

○さゞれづ(續古)夏 崇徳院 「さみたれいさるよもりいさゞ水のあせこままでよかりよけるりあ

さゞら(榮 御着裳)三つゞみこいよひつけてふえふきさゞらといふものつ死さま

さまのまひあやのをのこどもうさうたひゑひて心よくそりて十人をりあり

さゞらかみ(六帖)四(貫之集)「さゞら波よける汀所イすむたづひきみぐへんよのるべありけり

さゞらぐ(更級日記)九十心ちよたよさゞらぎなぐれ水もこのまようづもれてあ

とさりりみゆ

さゞらえ男(万)廿七 「山のおれさゞらえをとこ天の原とわたる光とらくいよしも

右一首歌或云月別名曰佐散良衣壯士也縁此辞作此歌

補 さゞら水(万代)夏、後徳大寺左大臣 「をいのるる夏やまけのさゞらみづ岩浪たけりさゞ

たれの頃

さゞむろ(夫)九 信實 「風りよふ野守のやどのさゞむろこりけあらねとゆふそゞ

みせり

さゞのいそ(堀次)大進 「よの山とねのあらいのそけいさよさゞの庵つゆもた

まらせ(新古)戀二 俊成 「あふことのかたの、里のさゞ此庵志の露ちるよその床りな

補 さゞの葉(貫之集)玉葉 冬 「篠のそれさえつるかへし足引の山よ雪をふりつ

みよれる

さゞのこき葉(狭)四ノ下 四十五 「さゞのくまひれくま川よこまとめてあそい水りへりけを

さまよひひちぎりりひかく云々

さゞのくま(古)大哥所 「さゞのくまひれくま川よこまとめてあそい水りへりけを

たよそん(源葵)七 さゞのくまよたよあらねばよやつれなく過給ふよつてても○笹

の隈といへる意よ但此哥の万葉十二よ左檜隈檜隈河爾駐馬馬爾水令飲吾外將見

とあるがもとかりさい發語にて心かゝひのくまをかさねいへるなりさゝのくまの
後にあやまりとかへへかるべし

補 さゝのや (續拾) 羈旅 一「かりまくらゆめむむをささゝのやれふうれほどのよ
もれあらうよ (万代) 戀四 道命 一「さゝのやあやめの草をふきをへてひまかくけふ人
ぞ戀しき

さゝぐ (万) 廿九 一「我せこがさゝけてもさるや、がしとあさりもよるりあをきゝぬ
がさ (源 玉葛) 一「私の君と思ひまうしていたゞれよあんさゝけ奉るべき (同 桐つは)

二「いみどきおくり物ともをさゝけ奉る (宇治拾) 二「このとがぬゝたちのまれよさ
さけられさるあらまきこそあれこそたがおきたるぞ (源 やとり木) 卅 御盃さゝけて

御さい参る (遊仙窟) 中未敢爲擊鞞履 (名義抄) 捧サ、グ (古事記) 神代 云々 立依指
擧而、〇雄畧段、三重燧指擧大御盃 (榮 もとの東) 一おとゞ御聲をさゝけてなきのゝ

いりたまへど何のりひりあらん
さゝぐろめ (夫) 廿八 一「山賤のゝづがかきねのさゝぐろめよぎもふまでのすみりと
やとゝ

補 さゝぐり (山家) 下 一「山風よみねのさゝぐりもらくくと庭よおちしく大それらの里

とあるがもとかりさい發語にて心かゝひのくまをかさねいへるなりさゝのくまの
後にあやまりとかへへかるべし

補 さゝや (續後) 羈旅 公相 一「あらい吹峯のさゝやの草まくらかりねの夢のむはぶともあ
一 (万代) 雜四 仁和寺入 道二品親王 一「さてもよを過しけるりとよそよとひかのさゝやといく
よとまりぬ (同) 同家 一「そら山の笹やの床のまろぶと鳥のねきこゆあけぬ此よの

(同) 戀一 後鳥羽院 一「わがこひの賤のさゝやの苦をあらみもりやゝぬらんまぐれふる比
(續拾) 秋下 洞院攝 政左大臣 一「かへてふくゝづがさゝやの秋風をおのがよさむとつ衣りか
(同) 羈旅 資季 一「ちかごとりのいかのさゝやのかりまくらとどりきよそもふゝかりけり

(新續古) 羈旅 光正 一「かりぬする岡のさゝやのふゝうきもどがふる郷とおもそまゝく
(同) 羈旅 爲氏 一「あづまのゝさゝやの床れかり枕ふゝもからもぬよをかさねつゝ

さゝや (遊仙窟) 細々許 (源 花散里) 初さゝやりある家の木さちなどよゝをめるよ
(同) 夕かほ 卅 三 夕ガホフ ナキガラ 一「とさゝやりよてうとまゝけもかくらうたけかり (同 帚
木) 卅 九 九たゞひとりさゝやりよてふゝさり (つれく) 四十 五 段 さゝやりある童一人をぐゝ

て (空穂 樓の上) 下 二 十六 けよちひささき木丁たてゝちつらひ給へりちひさき人々さゝ
やりある碁をんよごうちるたり

さゝやく (竹取) 三 十 云々 これをつりふものも猶ものおが是事あるべしなごさゝやけ
と親をそとめて何事ともあらせ

とあるがもとかりさい發語にて心かゝひのくまをかさねいへるなりさゝのくまの
後にあやまりとかへへかるべし

とあるがもとかりさい發語にて心かゝひのくまをかさねいへるなりさゝのくまの
後にあやまりとかへへかるべし

補 さゝまくら (續拾) 羈旅 時村 「露むすぶ野そらの庵のさゝまくらいくより月の影よな

るらん (續千) 羈旅宗 尊親王 「さゝまくらいく野の末に結びさぬ一夜をりの露の契りを

さゝけもの (榮わか枝) 廿大宮の御さうらひあるべしとて云々 世中よも御さゝけ物

いそぎのゝあるめり (伊勢物) 七段 七段 せうせ給ひてのちのみさ安祥寺にてけり

人々さゝけもの奉りけり奉りあつめたるものちさゝけをりありけりそこをくの

さゝけものを木のえごよつけてさふの前よたてたれば (大和物) 一さゝ夕もの一え

た二えたせさせ給へときこえ給ひはきば

補 さゝふ (万代) 雜三 顯氏 「どねりこが袖も露けしとををりのあけささゝふの行ささる

さよ

さゝふる (方丈記) 九市よいでうるよ一人が持出ぬる價猶一日が命をさゝふるよ

たよ及むせ (つれく) 廿八 身の後よ金をおして北斗をさゝふとも (白文) 廿一 身後

推金 拄 北斗不如生前一樽酒

補 さゝふね (夫) 冬二 源仲正 「うかる子が流れあうくる笹舟のとまりの冬の氷ありけり

(伯耆卷) 云々 此竹の葉をめされ御手づくら船を三つ造らせ給て云々 (詞林采葉抄) 一

少童の作レル如クナル篠舟 云々

補 さゝえ 竹筒。酒器。ナリ (三才圖會) 一和名さゝえの事といへり

さゝき (神代紀) 上四 鷓鴣此云婆々岐

さゝめ 草 (新六) 五 「むら雨よ野べのさゝめを分行ばかさけてそのをきる心ちせる

(千載) 戀二 右のおは 一 朝またれ露をさながらさゝめりる若づが袖たよかくぬれ

トを (堀百) 實 (夫) 廿八 「月さよとあけの野原のいら露よさゝめをける衣さぬれぬ

○貞徳云さゝめのナヒサキ草ノ名也 蓑ナドニムスベルモノニヤさゝめかるトヨメ

ル哥モアリ (千載) 戀五 一 さゝめかる荒田の澤よつたみもこのさめよこそ袖もぬ

るらめ (夫) 廿八 「山がつのむをびてりづくさゝめこそ衣のせれと雨をとよさぬ

(夫) 廿二 衣笠 一 ますらをのこのよさゝむとさよおふるさゝめかるよも袖ぬれ

けり (山家) 下 「あやひねるさゝめのお蓑さぬに死んかまたのあめを忘のぎがてら

よ (月詣) 五 源宗 光女 「さみざれよさゝめのみのもくちとてぬれくぞゆくのそら

の原 (夫) 卅二 定家 「旅人のさゝめの蓑をきてより一日ぬがせぬさみざれの比○瀆臣

云さゝめのこのいさゝめといふ草よてつくれる蓑なり堀河百首千載集散木集夫木

集あよと證ありくもく予がさゝめ考よいへり

補 さゝめり 三 下 おのづからけしきとる人のやをりらきいひさゞめく

を(承久軍物語)おもてもふらせさゝめりいてわたりけり宇治川ヲ(同)一とよさ
さめりいてとたう云々

さゝめく耳言(源朝のほ)十 せちようちさゝめりかさらひ給へど(同若紫)四十

かく人むりひ給へりとさく人のされならんおぼろけよはあらどとさゝめく(榮見
はてぬ夢)廿六 御をちの殿原世中をやすからせなけきおぼろけさゝめきたるの粟田と

のをおそろしきものに思ひきこえたるよかん(同)廿 四やがてうせ給ひぬれば此どの
いりあることよりと世の人よのそりあきよりもこれを大事よさゝめきさどぐ(源

夕かは)卅内よまるり給をせまさくさゝめきあけき給ふとすのふあやゝがる
(榮月の宴)十 世がたりよもあつべき宮の御こととをりあどさゝめき志のびもあへせ

とらひのゝれれば(同若紫)卅 同トくのよろしきほどよおそしませまゝくばとさゝ
めきあへり(同浮舟)十 八あながまたまへ夜聲のさゝめくしもぞろしぐましきあどい

ひつゝぬぬ(同松風)廿 大井への 打さゝめきてつりたれをてたちなどよくと聞ゆ
(枕)五 宮司かたをらいたさよことりさより入て女房のものとよよりてあどかうのお

そはかどぞさゝめくなりよ(小大君集)八 竹のあるところよて風の吹にいとどうさ
さめきければ「風吹を浪やのさどぐ川さけのあがる、水よ聲のりよへる(枕)五、こ

とくしういひたる藏人何ともせせ戸をおしあけてさゝめきいれバあきれていと
このすぢあきよりかどてたてるもをり(蜻蛉日記)中 八ふものみる人あやゝけよ

思ひてさゝめきさどぐいとわびしき(万)七 卅一「むつつをよたてるものさきかり
ぬやと人ぞさゝめきし汝がこゝろめ(源帚木)卅 六うちさゝめくこととゞもをき給

へバ(同桐つは)九 十人のみりこのことまで引いせさゝめきあけきけり(枕)十二、こ
とねりわらひのつぎしきを身ぢりくよびよせてうちさゝめきていぬるのちも

(大鏡)かゝることいとおろくぞきこえ侍りしとてさゝめく(源をどめ)廿 大宮の御
りたのねび人ともさゝめきけり(かけろふ日記)下 下より来てさゝめけを云々(宇治

拾)廿九 そのこととゞもあきさゝめきのしりあひり(同)十一 十一ゆかしきこといなど
さゝめきあひたり(同)十九 云々 あどいふこそあやゝけれをどさゝめくものもあり

(興風集)竹のある所よて風のふくよいとどうさゝめきければ(源東屋)四十 うちさ
さめきていとろけがる(同楨柱)四十 さゝめきさわぐこゑいとろけ

さゝめきと(源少女)廿 一かゝるさゝめきとをするよあやゝうかり給ひて御とゝ
とゞめ給へバ云々 さゝめきとの人々の(同若菜)上 十八 うちくゝよの給をける御さ

さめきととゞもの

〔さき〕先(源夕かほ)七 御さきのまつ布のりよていとーのびて出給ふ(同)ととめ(冊)四

ちとくおひのゝゝる御さきのこゑに(後)人しらす「あー引の山れもとちもちりよ

けり嵐のさきよみてまーものを(同)若紫)九「みや人よ行てかたらん山櫻風よりさ

きよきても見るべく(同)桐つは)四。弘徽殿 人よりさきよ参り給ひてやんごどさき

御おもひあべてからせ(同)紅葉賀)六 人よりさきよ見をめてーりバ(同)若紫)四十宮

へわたらせ給ふべりなるをそのさきよもの一こときこえさせおりんごてかんと

たまへバ(同)あゝし)十 四このねたがもぬさきよ(同)夕のほ)七 三十夜ふけぬさきよかへ

らせおまーませ(枕)三、四、どのもりの官人かどのかがき松をたらくともーてくびひ

き入てゆけバさきよさーつけつさりかるよ(同)廿八、大將のおんさきよおひたる補

(源わか紫)四十 をさなき人をぬきといでたりともどきおひあんそのさきよ

〔さぎ〕(夫)十七 「霜結ぶ入江のま菰うら枯てたつみと鷺のこゑもさむらー

〔さきよたつ〕(拾) 別讀人「わりるればまづ泪こそさきよたていでりでおくる、袖のぬ

るらん

〔さきよさて〕(源蓬生)九 まづおまをさきよたて、かれれたれぞなよ人ぞとどふ

(万)廿五 おろくめのまをらさけを、さきよたてゆきとりおせ

〔さきちる〕(古) 物名、いかい「かちよあたる波のーづくを春かれバいりゞさきちる花

ととざらん〇遠鏡よ云々ナル也打聽わろー補(万)十五 「秋そぎの咲ちる

野べのゆふつゆにぬれつゝまませよふけぬとも(同)十五 「かぎきよを君よこ

ひつゝいけらぎいさきてちりよー花よあらまーを(同)十五、十「藤原れふりよーさと

の秋そぎいさきてちりよき君まぢかねて

〔さきをおふ〕(源夕顔) 初御車もいさうやつー給へりさきよおせ給まぎ(同)をどめ

一 御さきおふ聲のいりめーきよぞ(枕)三、四 殿上人の隨身どものさきをーのびやりよ

短くおのぐ君達の料よおひさるもあそびよまどりて常よまぎをりーくまこも(同)

同 このゑのとりごより左衛門の陣よ入給ふ上達部のさきよとも殿上人の短くけれ

バ大さき 上達部 小さき 殿上 とき、つけてささぐ(源手習)廿 さまさうちおひて(同)夕顔

三十一日さきおひてわたる車の侍りーを補(うつは 樓の上) 殿のさきおふこゑて

〔さきたちて〕(伊勢物)十六 つひよ尼よかりて姉のさきたちてかりさる所へゆくを

〔さきたつ〕(源葵)七 御ぞ奉れるも夢の心ちして我さきた、まーりバふかくをめ給ハ

まーとおやひさへ(同)柏木)廿七 我こそさきたぐめよのことわりかうつらいまど、こ

がれ給へど何のりひかー(同)早蕨)十三 「さきよたつ涙の川よ身をあげバ人よおくれ

ぬ命ならまゝ(古)哀傷「さきたゝぬ悔のやちたびかなしき流るゝ水のうへり來ぬあり

さきたて(源うさふね)冊さからせ給ひて云々さきたてゝつりまゝりける補

(新古)冬具親「それくもる影をみやこまきたてゝくるとつぐる山のそれ月

補さきつと(万)四、五「をとゝの先年サキトシよりことまでこふれどぞも妹まあひがたき

さきら。筆のさきト(源鈴虫)五課師ノ今の上よざえもすぐれぬたけさきさをいとゞ心していひつゞけさるいとふと一〇クチサキラノ寛ナルトハ弁舌アルヲイフ也ルナリ(和名)三説文云唇吻入智佐岐良(瀆松物)一からのうらむらさきの紙よかける文字のつくり筆のさきらいとかこくおもろき(撰集抄) 名を釋氏よかり姿を釋門よかしてさきをみかく人たよも(同)二いそんや道心堅固よして心もかこくさきらあらん人々のおどりの心もそまで侍るべき(同)五智惠のさきらいとトくて又道心堅固よ侍り(とりおへそや)山ノ宮かきいで給へる手のさま筆のさきらたよいみどき人をも見るうな(後三年軍記)多くの兵おのゝ口さきをどきてこたへんとするを

さきのかと(土佐日記)かへるさきのかみのよめる(源晴蛉)四十常陸のさきの守あ

まがいのめは(同わの紫)五かの國れさきの守志ほちのむせめりづきさる家

さきの世(源桐つは)三さきの上も御ちぎりやふりりけん(同)四さきの世ゆり

くかん補(續古)戀三信實「むせびおく契のいまとおもへともあふさきの世をそとめか

りけん(新拾)戀二隆長「あふまでのむせをさりけるさきの世のむくいゝられてうさち

ぎりりな(續後拾)戀二讚岐「さきの世のむくいおもふもつらき身ままこひかんを

てぞりあしき(新後)戀二實國「さきの世はわれし心やつくしけんむくいからでのか

らまゝやの(風雅)戀三有家「さきの世をおもふさへこそうれしけれ契もけふの契のみ

さきのふび(源はし姫)冊さきの度霧よまどとされ侍りあけぞのよ

さきの松(源夕か母)十御さきの松ほのりよていと一のびていで給ふ

補さきく幸(万)十わがせこのさきくいまはとかへりきてこれよつけこむ人のこ

ぬりも(同)十五長哥「さきくもあるらんこどくいで見つゝまつらんものを(同)七、

五十「くさまくら旅ゆくきをさきくあれといそひべすゑつあがどこのへよ(同)九、

「白崎ハ幸ありまで大船よまらちゝぬき又りへりみん(同)十一「まさきくとい

ひてしものを白雲にたちたかびくときけばかかしも(同)十七「さぐかこの志がれ
からさきさきくあれど大宮人の船まちなかぬつ

さきくさ(催馬樂)此殿 このどののうべもととけりさきくさのあそれさきくさのあ
それさきくさのみつをよつをのかりよとのづくりせりやとのづくりせりや(古)序
「このどののうべもとみけりさきくさのこつをよつをよとのづくりせり

補 されあぐる(海道記)稻村といふ所ありさうき岩のうさなりふせる瀆をつた
ひゆけを岩よあたりてさきあぐる浪のそおのこどくよちりあぐる

されと(文徳實録)二 先先爾禱申賜倍留 (續後紀)六十 前々爾申事爾附氏 (源維か
本)廿 さきと御らんせしよあらぬ手の今少しおとあびまさりてよづきたる

書きまあとを(更科日記)さきとのやうし心をそくかどはおぞえであるよ(榮紫
野)六 たゞさきとのさまよてとおぞめはあるべし(同)十 さきとかくこゝろ

のどろよことかくておりさせ給ておそまはさりとひさしくおそまさりつぎ
バ(源紅葉賀)廿 さきともかやうよて心うでりけをりありければあらひて云

(同 御法)十 さきともかくていき出給ふをりよならひ給ひて云々 補(万)六十八 ぬき
かくる島のさきと(同)十三 八十島の島のさきと

さきもり 防人(續紀)二十 太宰府防人頃年差坂東諸國兵士發遣由是路次之國皆苦供
給防人産業亦難弁濟自今以後宜差西海道七國兵士合一千人充防人司依式鎮戍集府

之日便習五教(万)七ノ 廿五 「ことゆくよひさきもりがあさころもかたのまよひのこ
れりとりとん

さきもおとせ給て(源夕のほ)初 御車もいたうやつ給へりさきもおとせ給て(源
同 未摘)九 さきかおもおとせ給ておとせ給てのびいりて

補 さきさきび(散木)庭もせよさきさきびさるつき草の花よかゝれる露のしら玉

さゆ(夫)十三 定家 「よをかさねはさおる虫のいそぐ哉くさのたもとよつゆやさゆらん
(兼輔集)「いつとても春くることのおきこよひさえぞまさらんとけん物り(万)

廿九 夜の霜ふりいとどおと川の氷こもり冷夜を(長秋詠藻)「よよらぬよその空
りを秋こよよさゆるハ月のからひかれども(拾愚)上 「とけぬ上よかさねて氷るた

よ水よさゆるよころのかれぞみえける 補(千載)秋上 「いでぬより月みよとこそさ
えよけれをさきて山のゆふぐれの空(同)頼圓 「照月のかたさえぬればあさぢそら

雪のしらよむいひなくなり(同)夏 成保 「さまたれの雲のさえまよ月さえて山すと
とぎれをらよなくなり(長秋詠藻)下 「秋の月ひるとい見えてさえさむし雪とおも

ふの庭のちらつゆ(新古) 秋下式子「ふけよけり山のちかく月さえて十市の里に衣うつこゑ(拾) 冬友則「とびかよふをしの羽風のさむければ池のこりぞさえまさりける(千載) 冬法印「霜さえてさよもなぐるの浦さむと明やらせとや千鳥なくらん(新續古) 夏俊頼「ちまつ山ならのわり葉よもる月のかけさゆるまで夜更けり(山家) 上「庭さゆる月かりけりかをとなへしちもよあひぬる花と見たれば(千載)

夏慈圓「山かけや岩もるしとづ音さえて夏の外あるひぐらゝの聲(万代) 夏讚岐「さき九川くたせ鴨舟よさきさをの音さゆるまで夜更けり(千載) 秋上「いそまゆくみさらし川のおとさえて月やむせぬ氷なるらん〇さゆるの凜々の意寒さといことかり(新古) 秋下慈圓「大江山かたふく月の影さえて鳥羽田のおもよおつる雁りね〇

正明云さえていそれてといふこと此集のころよりまゝ見ゆ俗語よちらりのみいふかり

〇さえぬ(後) 春上伊勢(六帖) 上「ちら玉をつゝむ袖のこかりるゝいそるゝ涙もさえぬかりけり

補 さゆり葉(千載) 雜上俊頼「しそきてバ野島が崎のさゆり葉よ浪こそ風の吹ぬ日ぞなき(万代) 夏定家「かりねせしちけとの枕結されてけさあらそかるちたのさゆり葉

(同) 師光「夏野なるちけみが中のさゆりさの花をよきてまきさよかれ

さゆと(夫) 廿三仲正「いりかれバ戀よむさるゝさく布のちとさゆとかる人のこゝろぞ

さめ(源) 常夏初ねふさささめぬべらんことかたりてきりせ給へ(狭) 三ノ下おもしろうめでさりつる物のねとあさめて聞きぎりの人々めを見かたして物もいと

れぞあされたり(源) あかし 四十あいかく人忘れぬものおもひさめぬることちして(空穂) 嵯峨院 九十例の御うぶやしかひ所々よりあり御うぶやいとおもしろういり

めしけれを大將いりふし給へまある事もあし女御殿もえいり給を(云々) ちち犬宮の御時面白かりしをこたみのさめたりやといふ

〇さます(源) 柏木 卅つねあき世のさがよこそいいとととも又たごひあき事よや

いととつもりぬる人いひて心づようさま侍るを(同) 葵 四十かゝるかあしき

さぐひ世よなくやいとおもひなつゝ云々さきの世をおもひやりつゝなんさま侍を(同) さかき 六いりよぞやきせありて思ひきこえ給ひよのちまたあそれもさ

めつゝかく御中もへどりぬるを(同) あさかほ 四けふの老もよそれうきよのかけ

きみあさめぬることちあんとでも又ない給ふ(同) 手習 卅これよことみあさめてかへり給ふ子ども(榮) 蜘蛛のふるまひ 四日よそへてもおやしめしさまさせ給ふことか

一(源夕かほ)廿右近のたぐあなむつろいとおもひけるこゝちとなさめてあさまと
ふさまいといと(同 總角)八十 おもひさまふふいよもせんとまもれど(同 榎柱)
六 けなき戀のつまなりやとさまいび給ひて

○さまた 目ヲ(源わり紫)四十 またおどろりい給とトかいで御目さまいさこえん

さめト(更級日記)此鏡をこさようつきるかけをよよれをみればあそれよか
かききぞとてさめトとあき給ふをそれ(同 山家)上「鶯の春さめトとなき
さる竹のいづくやあまたあるらん(宇治拾)一このちでのさめトとあきけるを見
て(同)六 殿のおをト心よもおやさぬよやとさめトとかく

さみたれ(空穂祭の使)三 五月雨ふりぬるうれへを給ひてそこけちりきはど
をたまゆる給とやおもふ事をもかたもいはるけて一がを(敦忠集)「いつとなく

あづこゝろあき我戀のさまたれよもまたれをむらん(同 拾玉)五「夏引のいとさ
とざれてむせりれ逢見一人よもかれえぞせぬ(金葉)夏 兼久「おなトくのとへの

てふけあやめ草さみたれたらばもりもこそそれ(同 師頼)「さまたれぬまのいと
がさみづこえてまこもかるべきかたもあられど(後拾)夏 範永「さまたれの見えいを

さゝのそらもあさりの沼のこゝちのみして(同 相摸)「さまたれぬむづのみま

きのまこも草かりをまひまもあらトとぞおもふ

○補 さみたる(和泉式部日記)「おなりよさまたるゝとやおもふらん君こひわ
たるけふのあがめを(万代)夏 土御門院「あやめおふるぬまの岩垣かきくもりさもさ
みたるゝきのふけふりか

さみたれがち(狭)四 上 夏 のもどめよもかりぬまたいさよさみたれがちよものむ
つろいさひるつらた云々

さみたれ髪(夫)八 家隆「つれトとあやのあまのをくささみたれがみやほさ
でねぬらん

さみたれの月(輔親集)「あひみせでかりむる空のくもまかおもひもれせぬさみ
たれの月

さみたれの宿(月清)一「きのふけふ千里のそらもひとつよて軒をよくもるさみど
のやと

さみたれて(俊成卿女集)「さみたれて浪よせまざる須磨の浦のもしほよくさすあ
まの袖哉(多武峯少將物語)「かゝりてふよりのとおもへどさみたれていと涙よ

水まさりぬる(曾丹集)「さみざれて物おもふ時の我宿のなくせみさへよこゝろ

サソイヤ

さみせ アナドル (文選) 八曹子建七啓志飄々焉曉々焉似若 レ下 狹六合而隆九州 補 (東鑑) 徧惣領

さー(枕) 七 朝日のそなやりよさーたるよせんさいの菊の露こぞるさりりぬきかかりさるもいとをりー

補 さー 見 サシ 讀 サシ (伊勢集) 「いとまたき過ぬる秋のかさみは枝よもみぢぢりさーよける(後) 春 下 人の心のたのとがたくかりよければ山吹のちりさーたるをこれ見よとてつりーける云々(同常夏) 十 おもいろき梅の花のひらけさーたる朝ぞらけおぞえて

さーいる (玉葉) 三 春のさちりき梅を折てさー入るとてよめる

さーいらへ (源夕顔) 四十 ひとりぢち給へとえさーいらへも聞えせ(同繪合) 十 時々さーいらへ給ひけるほどあらまほー(同初音) 十 かよとよさーいらへま給ふ御ひかりよとやされていろをもちまをけぢめことよなんこりれり(同横笛) 十 まいてつゝまーさーいらへかれバ

さーいで (源橋姫) 四 参りよるべく侍りーうとさーたかくおぞえ侍てえさーいで

侍らで (枕) 二 物語などさるあさー出て我ひとりさいまぐる物すべてさー出のこら

いもおとさもいとよくー(狹) 下 九 女房さちあまたさー出て見る(枕) 三 その木々時もわりぢこさもとぢのつやめきて思ひかけぬ青葉の中よりさー出たるめづらー

(同) 四 たゞこゝよ人づてからで申べき事なんといへばさーいでゝとふよ(源胡蝶) 一 花やりよさー出たる月かけ(同空蟬) 九 曉の月くまかくさーいでゝ

さーを (鷹) 十四 手にをきていでーさーをそれぬればのべの花よとたれあひかん

さーをへ (源空蟬) 十 さーをへたる御文よあらでさう紙に手習のやう

よ (源兼澄集) 「さーをへて入江よいそくあま舟の花のあたりを過うかるらん(源

帯木) 四十 やうのついであらんことおもいとかたーさーをへていりぢり御文など

もかよせんことのおわりなきをおぞよ(空穂藤原の君) 十 大方の九よあさるあ

んかりそれをさーをへていんとてあて宮よ御文あり(大和物) 四 女京よさよねりさーをへいづこともかくてきされバ此つきてこー人のもどにゐていとあそれとおもひやりけり(拾) 八 一らま「玉江こくこもかり舟のさーをへて浪まもあらばよらんとぞ思ふ

さしとづを(源 浮舟)五さいつ比とたし守ぐうまごのさらの楫さしとづいておちいり侍りよなる

さしとかれ(源 をとめ)廿三さいとかれさらくしうめづらしけあるあたりよ(同 寄生)五十ひとへよあらぬ人からばあな物くるなりともしたあめさしとあたんよもやそうるべきを(同 東屋)四十よそのさしとかれさらん人よこそ云々(同 桐つは)廿とて

はうちあまれぬべきさまのし給へればえさしとあち給せせ

さしとさむ(土佐日記)あるものよのまどてふなやりたよさしとさめりければ(朗詠)折梅花挿頭

さしへたて(源 総角)十御りたのらあるみどりき木丁を佛の御りたよさしへたて、かりそめよそひふし給へり

さしぬき 指貫(枕)七、キヌニスバロナル名ヲ指貫もかぞ足ぎぬもしひさやうの物のあし袋かともいへりしかと云々(狭)四十一上龍膽の織物の御さしぬきの枝さし花

の匂ひ只今折て見るやうよおりうりされさるめもかゞやくさりみゆる(和名)十九、奴袴作師奴積乃波賀万(源 夕かほ)二十さふらひわらひのをがさこのましうことさらめさ

たるさしぬきのを

さしぬひ(源 総角)九、あざやりある花のいろくよつりさしからぬをさしぬひきつ(同 やとり木)五十人々よとりちらしあどしたればおのくさしぬひかどせ

さしとさる(源 浮舟)廿七ちひさき舟よのり給ひてさしとたり給ふぞ

さしとさき(源 さかき)三十ことよさしときたるさまよあまをかはとて(うつ不藏開)中ノ人々あまた物し給ふを昔の事いたえ侍らトさしときての心よりらぬことあそ侍れ猶とさりおそしませとあん(同)廿七、これり物せらるゝ所なればよく

しとみ給せん所もあらんがむづりさよさしときてもえ聞え御覽せざりし人よも侍らぬと此いとむつりしけなる所よとたりおそしませかんや(源 とかき)下ノ人をしよさしわきてそらえひをしつゝかくの給ふをれいのやうかれといとむねつぶ

れて

さしりへ(源 紅葉賀)廿よつりしからぬ扇のさまりかどみ給ひてとがもさまへる

よさしりへて見給へば

さしりくす(源 紅葉賀)廿かそりりのえからせえがさるをさしかくして見りへり

たるまよ(同 横笛)十まろかほりくさんかほくとして御袖してさしかくし給へば

さしよる(源 末摘)七かそらいしとおもひてさしよりてきこゆ(同 紅葉賀)三人

まよさしよりて(同 盤)六扇をさしかくしたまへるかたをらめいとをうけけり
さしたる(宇治拾)八十二是ほどの大事日のさたまりたる事を今とかりてさしたる障
もなきよ延引せしめ給ふ事(著聞)六ノ知足院殿何事までりさしたる御のぞとふか
りりけること侍りけりさしたる御望をどのありけるにいとづからおとをいせ給ひ
けり

さしたること(宇治拾)十四 さしたることかんにそんとおもふ命のほど時かそさせ
こといひけれ

さしそへ(千載)秋下院御製「もろちをよ月の光をさしそへてこれや赤地の錦あるらん
さしつとふ(源 夕かほ)廿物おそろしうをさし思ひたればかのさしつとひたるそ
まひのこころからひからむとをうけくおせ

さしつりそ(三代實錄)十八齋部宿禰高善乎差使天大幣乎令捧
さしつぎ(源 浮舟)卅かのさしつぎおり給ふ(同 わりあ)上ノ「さしつぎよ
とるものよもが万代をつげのをぐの神さぶるまで(同 紅葉賀)五 またとらそよて

秋風樂まひ給へるかんさしつぎの見ものありける(同 末つむ)三左衛門のめのと
て大貳の尼のさしつぎよ覺いさるが娘大輔命婦とて(榮花山)二かくて攝政よへま

た此おとゞの御さしつぎの九條殿の御二郎内大臣兼道のおとゞあり給ひぬ

補さしかは(馬ノ具)著聞十其轡をさけてさしなををどらせたりけるを

さしかほ(源 帚木)四我心あやまちかくてみすぐさばさしかほしてもなとり見ざ
らんとおせえたれど

さしかがら(伊勢集)三拾賀「大ぞらまひれとるさづのさしかがら思ふこころの
ありたをるりか(六帖)上「さしかがら野のあら露まぬれにけり秋てふことを紅ま

して(拾)賀九條「さくら花こよひりさしよさしかがらかくて千とせの春をこそへ
め(同)戀四「さしかがら人のこころをみくまれ、うらのたまゆふいくへあるらん
兼盛

(空穂 初秋)五十 左大將殿の大君をべて此御ぞうさんたち女たちさしかがら御形い
ときよらかり(蜻蛉日記)中「宿みれば蓬の門もさしなからあるべき物とおもひけ

んや(後拾)戀一「から衣むをびし紐いさしかがら袂いそやくくちよ物(同)
能宣

哀傷山「そをとりし玉の小櫛をさしなからあそれりなき秋まあひぬる(源 若菜)
田中務

上ノ「さしなからむりしを今よつとふれば玉のをぐしぞ神さひよける(金葉)夏
廿三
政左「みか月此てる日のかげいさしなから風のみ秋のけしきあるりか(續後拾)神
大臣
為道「こするかよ藤のりさしのさしなから神まつりへ春此むりしは

さしからぶ(源 胡蝶)十親ときこえんよのまけかうごかくおとしまはめりさしから
び給へらん(源 玉葛)五ふりさしむりひてあきけり(同 夕かほ)廿何でゝろもあき
うよてさしからべたらんよりさそからとり

さしむりひ(源 玉葛)五ふりさしむりひてあきけり(同 夕かほ)廿何でゝろもあき
さしむりひを哀とおやれまゝ(同 空蟬)四かほなどいさしむりひたらん人あどよ
もわざと見ゆまどくもてなしたり(同 帚木)十けさしむりひてみんほとりさても
らうさきりさ罪ゆるしみるべきを(同 せとめ)十五さしむりひさる子どもの數おそ

くかりてそれままりせてのち此親まゆづらんことあひかゝると(狹)四下御文のけ
しきあども云々おろりからぬさまよいひなさせ給へるさまあどもさしむりひ聞え
させさるこゝちのみせさせ給ひて

さしのぞき(源 蓬生)五むりあきことよてもとふらひ聞ゆる人のかき御身なりたゞ
御せうどの禪師の君をりりぞまれよも京ま出給ふ時いさしのぞき給へどそれも世
よあき古めき人にて(同 柏木)十よるかどもかこよのおそとのでもらせひるつり
たなどぞさしのぞき給ふ

補 さしのく(宇治拾)三、うちさしのきさる人よもおそしまさき

さしおどろり(源 夕顔)七御をばめをみすぐさでさしおどろりけるを御いらへ
もあくるどへけれ

さしおく(源 帚木)廿やまどあでいさをいさしおきてまづちりをたよと親のこゝろ
をとる(同 末摘)卅まぎるゝものいさしおられて御けしきのあらたまらんあんのり
しきとの給へ(同 あらし)十三こゝろりなしきさまよのうれしきいさしおかれ
て(同 あふひ)廿九菊のいささをめる枝よこき青まびの紙なるふみつれてさしおきて
いよけり

さしくむ(後)八(戀四よみ)「いよへの野中の清水みるからまさしくむものいさみた
かりけり(蜻蛉日記)中、人の家此前ちりきいづみよ八月十五夜月のかけうつりさる
を女どもみるすと垣の外より大道ま笛ふきてゆく人あり「雲井よりあちくの聲
をきくかへまさしくむをりみゆる月け(こちくウチ)ッケノ心也

さしぐり(挿櫛)五、あさましき物、さしぐりみかくほどよ物まさへてをりたる
(源 繪合)三、さし櫛の箱の心葉(催馬樂)挿櫛さし櫛の十まり七つありく々と云々

補 大鏡よ云一品宮のせらせ給へりたるよ弁のめれとの御供ま候がさしぐりを左ま
さゝれたりければあこよなくいあしくささるぞとこそ仰られけれ」とある

いくりの右あさねべきものを左よさしるるを三條院の見とがめ給へるかり雅亮装束抄云たうまのさしぐいといふものを右の物いみのかしらよよこさまよさねなり類聚雜要抄云五節童女頭物忌付事二所ニ付之左ハ耳ノ上程右ハ頗後ニ寄テ付之其故ハ用差櫛時ハ此物忌ノ上ニ横サマニ差也(後)一^雜女どもたちのもとよつくしよ

りさしぐいを心ざとて

さしやる(源紅葉賀)十かきあせせりひきてさしやり給へれば云々ちひさき御

不どあさしやりてゆい給ふ御てつきいとうつくしければ

さしませ(新古)賀かき人々さをひいで池の船よのせて中島の松り及さしま

をほとをりくみえければ

さしこえて(源東屋)十またをさなくなりあせぬ人をさしこえてかくいひあるべ

しや

さしこめ(源帚木)十五いとむつりけよさしこめられて人あまた侍るめればかこ

けよときこゆ

さしこみて(源横笛)十君たちのいもけかくねおびれさるけむひかどこ、かこよ

うちりて女房もさしこみてふいたる

さしこい(夫)十一「さしこいてをさしるるまねなともをみなへしをぞさをり

よもくる

さしこもり(源総角)廿あとさらめきてさしこもりかくろへ給ふべき物のくまざよ

かき御をまひなれば(千載)秋上一八重葎さしこもりよ蓬生よいりぞり秋の分て

まつらん(古事記)上十八於是天照大神見畏閑天石屋戸而刺許母里坐也

さしこて(土佐日記)おろつより浦戸をさしこてきいつ(源寄生)九十此車もこのとや

をさしこてくるなりとみゆ(千載)神祇上一三笠山さしこて來よけりいそのりみふるさ

御幸のあとをたづねて

さしこて(竹取)十かの十五日つりさしこておろせて勅使よ少將葛野のおほくよと

いふ人をさしこて六衛のつりさ合せて二千人の人を竹取が家よつりせ

さしこて(發心集)八今日いさしこて申べきとありてあん(源柏木)廿心の内よ思ひ合

することどもあれどもさしこて慥よいえもおしもからせ(同)七さしこておもふこ

とをかきたよき、すぐりたけかるよましてわりかき御こゝろまどひども中々こ

どもゆりぬよや(伊勢集)卅「こもりえよ思ふ心をいりでりの船さを棹のさしこてあ

るべき(源源標)七そくえうよ云考へ申たり中のおどり腹よ女の出来給ふべいと

ありしよとさしてかかふなめり云々うれしとおぞす(同)^十。明石上さして人からのをりしかりしも所がらよめづらうおぞえさかかどかさりきこえ給ふ
○さしよさして(宇治拾)^{十六}。大きなるくちをかきりけり長さ二丈計のあらんと見ゆるがさしよさしてさひ來れば

さしあせせ(源 行幸)^十御こゝろをさし合せての給もん事とおもひより給ふよ

さしあたり(榮 晩待星)^四一の宮御元服せさせ給ひて東宮よたせ給ふおもひつる

ことかれとさしあたりていといめでさし(源 桐つは)^三さしあたりて世のおぞえも

なやりなる御りたよよもおとらせ(同 帶木)^十さしあたりてをりしとも哀とも心

まいらん人のたれもしけあさうさかひあらんよを大事あるべけき(同 稚の本)^廿よ

の常の別とよさしあたりてい又さかひあきやうよのみ皆人のおもひまどふ物あめ

るを(同 帶木)^廿さしあたりてみんよはわづらひく彌(著聞)^{十六}うその空よはお

ぞゆれとさしあさりて人もぞりければ

さしあつまり(榮 つるの林)^十御たうくのそをさしあつまりてかいひさをい

てそらをあふぎて

さしあけて(宇治拾)^九ほをくらうさけかるこゑをさしあけてかくくのむ

さしあふ(檜垣 楯集) 桶をひきささげて出るよも國の守神拜し出らるゝ道よさし

あひたればめさとさるもの見つけて(榮 衣の珠)^二さまよ御ときやう聲々さしあ

ひのゝいれといとたへがたれなる御ありさまあれば(源 あふひ)^四りたよさし

あひたればえしもふり捨給そで(落窪)^一よろずひおとせるほどよさきおひてあま

た火ともさせて小路ぎりよ辻よさしあひぬ(狭)^三中やをら出給ふよ有つる車の人

よや烏帽子直衣なる人のふとさしあひたる大將が外ノ人ニ(源 東屋)^卅句ノ御車をと

も例からでおとすよさしあひて北ノ方おいとめたれば源 榎柱(源 榎柱)^廿この大

將の御いさほひさへさしあひ

さしあふ(續後)^三たのめけるをとこさしあふことありて命あらを明日の夜必らせ

と申さりける(榮 さまく)^三大嘗會の御いそぎぞ有べき東宮の御元服十月とあり

つれどかやうよさしあひさる御いそぎともよて(明月記)文曆二年二月十八日今明

自身毎日有指合事廿一日來進由示之仍止了(新古)^上雜東山よをみよまかりて侍と

てこれくれさをひけるをさしあふことありてとゞまりて申つりそしる(玉葉)^下秋

紅葉御覽せらるべしとて侍りける日さしあふ事ありてのびよければ後嵯峨院へよ

みて奉らせ給うける 月花門院

さしあて(源 浮舟)九あのをたたりよらうと給ふ所くの人皆おせよてまゐりつらうまつるとのいよさしあてかどつゝ、

さしあて(源 夕のほ)廿むいのかゑくみたりがさく壁の中のきりくまたは間どほは聞からひ給へる御耳よさしあてたるやうよあきみたるを中々さまりへておせさるゝも(源 蜻蛉)卅。氷ノ所。かいらうちおき胸よさしあてかどさまあうする人もあるべし

補 さしあゆむ(濱松物)四 雪打らひつゝさしあゆみいで給へる御かさちの

さしき(座敷(平家)卅一河越太郎重房が女もありけれどもそれを別所の所へうつし奉りてさしきうつらうてぞ置れける(同)十九日頃めさる所へ入られせして遙ま

さがりたる所よさしきをうつらうてぞ置れさる云々 出され参らるるよあるよ剩へさしきをたよさけらるゝ事のくちをさよ(禁秘抄)五 錦端席御座鋪外不用事也云々

(長門平家)十四。ノ所 扇の風よふけて座敷よたまらぎくるりくどぞめぐりける云々 此矢もづさせ給ふかと祈念して日を見あけされば扇の座敷を定りたる云々

此座敷ハ居トコロ。タイフコ、ロ也。

さしき(枕)七 八幡のみゆきのあへらせ給ふよ女院御さしきのあかよ御こしをと

どめて(空穂 藤原の君)四十 加茂川の布とりよさしきうちて(古事記)上ノ毎門結八

佐受岐(神代紀)卅上ノ假殿此云佐受根(源 あふひ)十 式部卿其さしきよてぞ見給ひける(更科日記)五 十さしきともようつるとて(宇治拾)十一 一條富小路よさしきうち

て(源 あふひ)五 ところくの御さしきころくよあつくいたるあつらひ(落くぞ)二 一條の大路よひまたのさしきといりめうて

さしき(宇治拾)十二 今むり一條さしき屋よある男とまりてはいせいとふし

さしき(新千) 講讀よみ「いりかればあめちが原の冬草のさしきあくてい枯もてよはん(新後)戀二「よとよももゆともいりいさき山さしきもつれなき人

よしもせん(後拾)戀一「かくとたよえやいさきのさしき草さしきあたらトおもゆるおもひを(夫)廿二「あもつけやめちが原此草がくれさしきあしよもゆるおもひぞ(新葉)冬 冷泉入道 「冬さぬとけさいさきの峯よおふるさしきもくもらぬ空ぞ

いぐるゝ(新古)戀二「あふこといつといふ死のさねよおふるさしきもたえせぬおもひあるらん(万代)戀四「忘れトともよいさきのさしきも艸さして契しことのもぞりし

さしも 然(源 初音) 五 さしもことごとくもてなし給せ(同 あさかは) 八 さしもあらぬれそのことをたよ(同 帯木) 初志のおれみされやと疑ひきこゆることもありりどさしもあどめきめかれたるうちつねのすきくさかどの 云々(同 一ひめ)
廿 御ころのまぎらそしよもさしもおどろりせ給ふをりきこえがれ侍らば(枕)
八ノ 山の井さしもあさきためし成せどめけん(源 帯木) 十 さしをりてもかどり見ざらんとおぞえたれどそれさしもあらど(同) 廿 さしも見給へざりしことかれと心やましきまよおもひ侍しよ

さしきぎ (源 空蟬) 九 またいとどかきこちよさこそさし過たるやうかれとえもおもひわりせ(同 帯木) 廿 さしきぐいたりと心おりれて(同) 卅 これのたれ又さし過たることなくもの給ひけるりかと(同 わか紫) 廿 一 めのどのいとさしきぐしたるころをせのあまり

さしきぎ人 (源 夢の浮橋) 十 例の物めでのさしきぎ人いとありがたくをりしと思ふべし

さしすぎ (榮 玉の村菊) 廿 七月廿日火出来て土御門殿やけぬ大方其あさりの人の家のこりかくて四五丁のやどやけぬさしすぎやうこうるんもやけぬ

さび (拾玉) 五 「あそれりを檜をら杉をら風さびてまいらもどりもかしましきさへ(同) 一 「宿さびて夏も人めりれよけりかよけりらん庭のむら菊(同) 四 「手よむをぶおとこの瀧よ夏さびてましくかりぬ松の下風(風雅) 秋下 後鳥羽院 「何となく庭のよもぎも下をれてさびゆく秋のいろぞかかしき(古事記) 上ノ 勝佐備離天照大

御神之營田之阿(万) 十八 「そり袋これのたをりぬをりぶくろ今へえてうが於吉奈佐備勢牟(玉葉) 秋下 覺圓 「夕つく日色さびまさる草のいたよあるとよもあくよこるむしのね(伊勢大輔集) 「ちりつもとこのまくらもさびよけりこひるる人のぬるよかければ(風雅) 秋中 公蔭 「夕日さけ外山のこむ秋さびてふもとの小田も色付よ

り(同) 秋下 永福門院 「うす霧のあさけれ梢いろさびて虫のねのこは森れたくさ(同) 冬章義 「かがめやる岡此やかぎの枝さびて雪まつそらのくれぞ寒けき(新古) 秋下 慈圓 門院

「なが月のいく有明よかりぬらんあさちの月れいとさびゆく(拾玉) 四 「あさとどり春のあがめもやどさびて獨くれぬる山のそれ空(同) 六 「やどさびて人めも草もられぬれば袖よどのこる秋のちら露(月清) 一 「明がさのま山の春れ風さびてこ

あろくたけとちる櫻りか(同) 「さよふりきあらし音よ山さびて木の間に月のか

夕のさむけき(万) 四ノ 廿八 「まそかみ見ありぬ君よおくれてやあしたゆふべよさび 左備

つゝをらむ(同)一ノ春山と之美佐備立有云々山佐備いませ(伊勢物)百十「翁さび人あとがめを狩衣けふさりりとどたづもかくなる〇(新釋)六十云おきささびのさびの手ささみのささみはおおしく翁のころろやりのあわざる事を翁さびといへるよて云々(夫)十六「露こるるれの、原の霜の上よさびたるよその月をみるりか

〇補さびいら(万代)雜三「山かけやを野をかけて住庵のものさびいらようづらかくなり

さび鏽(源朝かは)十トやうのいたくさびまければ補(小大君集)「ときおきいさやの刀もさびまけりさしてひさしくやへぬらん

さひつゑリッサカ(空穂 藤原君)卅おとゞくれのあいたささひづゑつきてぬの、ひたれきて立給へり(宇治拾)九男のいもいかへりあひたりければとる物もとりあへぬまけて西へもする冠者ぐ家のまへるとよて追つめられてさひづゑして額をうちとられたりぞり(和名)十國語注云鏽音博漢語抄云、鋤屬也、釋名云、鏽迫地去草也

補さびころも(續古)秋下太上天皇「やまびこのこたふる宿のさび衣わがうつ音やほり

よ聞らん
さび寂真(源 帚木)八世まありとひとまあらぬさびくあそれたらむ葎の門品法親
(山家)下「松風の音あそれなる山里にさびさそふるひぐらゝの聲(新續古)
王覺助「さためなきころろやみえん山里をさびといひてまたうられな補(万)
十五、「とほき山關もこえ來ぬ今さらまあふべきよのあきがさぶさ此さぶハ不憐也
卅二

さも(空穂 藤原君)九春宮よりもの給はずれとまたさもさためられざめり(源 東屋)
十大將殿の御さまかたちのそのりよ見奉りよさもいのちのおるこち給ひり(源 末摘)廿あそれさもさむき年りな(同)廿上五あめと人目よくあき宮の内れ有さまよさもうつりゆく世りかとおぞつゞくる(同)玉葛卅親のりほのゆりきものところをさけさもおぞさぬりとして(同)もみちの賀廿さもふりがたうと心つきかく見給ふ(同)楨柱廿さも心よかかぬ世りな(同)わ紫五さも人のこもりぬべき所々よもありか(源 さかさ)五かむらぬ色をうるべよてこそいがきをもちえもべりよけれさもころろくときこえ給へ(玉葉)春上「ひとりのまがむる

增補雜言集覽 卷之四十七 四十四

やどの春の日のさもくれがされものよぞ有ける

さもいそれたりる(竹取)七火風ノ皮此かまぎぬの火よりやりんよやけをばこそまことならんと思ひて人のいふことよまけめ世よあきものおれバそれをまあとゝうたがひなく思さんとの給へ猶これをやきてこゝろとんといふ翁それさもいそれたりといひて大臣よりかん申をといふ(うつろ 俊蔭)六十けよさもおおせざるべき事おれど(同 藤原君)廿七かくちひさきめのをらのをのまつりせ給ふ事みぐるべきことかりと聞ゆればさもいそれる事ありとて人のさるべきつりせ給ふ(同)卅一此位をりへ奉りてひと國一つを給とらんと申さもいそれりとして大臣の位をどめられて美濃の國を賜ひつ備(宇治拾)三、まつ大太郎が入べきといひければさもいそれたりとて身をさきよなして入ぬ

さもせべら大鏡序そこよおせせるの其をりの女人よや云々さも侍らぬそれのそやうせ侍りよゝりバ是の其後あひをひて侍るをらまべあり(源 帚木)四十さも侍らぬ此二年をりかくてもの侍れど(宇治拾)廿四、さる樂を給ふりそれの物語よりのまさる事よてあらめとまたしきよわらひければさも侍らぬ

備さもらふ(万)七十五大御舟をて、さもらふ高島此をのちこれ、おぎさよおも

そゆ(同)卅三長哥いつくも此夜のあけむとさもらふ(同)六十八「風ふけば浪りたゝむとさもらふよつたれ細江浦がくりいぬ(同)卅八「天漢いと河浪のたゝね

ともさもらひがさゝ近きこの瀬を(同)卅四、あさおぎよへむけこがむと佐毛良布等こがをるときよ

さもや(源 橋姫)四十返々もちらさぬよをちりひつるさもやと又おもひみたれ給ふ(同 帚木)七、さもやありけん、いみどかりけること哉と思へるを、うととおおせ

さもこそ(大和物)二「さもこそ、の峯のあら、のあらりらめなびさ、枝をうらみてぞこ(古)戀三「うつ、よのさもこそ、あらめ夢よさへ人めをるととるがわび(小町)

さ(重之集)六十一「さもこそ、の人はおとれるわれからめおのが子よさへおくれぬるるか(忠見集)十一「空蟬のさもこそ、かりめ君からでくる、夏をばされりつけま(六

帖)四「住人のさもこそ、あらめいふ人のかさる聲こそ、あやかりけれ(伊勢集)(拾)戀五「さもこそ、のあひまること、のかさうらめわをせとたよいふ人のおき(拾愚)上

「おもゝろく櫻さきけるこのよりかさもこそ、月のそらよむむとも(鴨長明集)「さ

もこそ、の花をめぐらむいろからめおもかたよそゆるうすもの、袖(拾玉)七「さもこそ、の川のせでとよりはむらへるせれよまよ浪のそがぬき

さもある(源未摘)六けよさもあること俄よこれ人も打とけてかたらふべき人の
 さもよきととをあれかぞ云々(同夕きり)六十さもあること、いおぞーながら
 さもあらばあれ(源賢法眼集)「さもあらばあれ人のとせとも花の木風がくれよ
 ぞう、べかりける(拾)戀五よみ「ひとふるよをををよりむさもあらばあれいさ
 てりひかき物おもふ身(二帖)四「よの川よりのりそれよさもあらばあれせよ
 かるふちのなくばこそあらめ(順集)六十かゝるまとるよさふらふことさへまをゆ
 けれどさもあらばあれよひとこそきゝてそりらめ(新古)戀三「おもふよの
 志のぶることぞまけよけるあふよかへばさもあらばあれ(式子内親王集)「色々
 の花も紅葉もさもあらばあれ春のよふりきまつ風のおと(拾員)廿「あとのたぐ煙
 さかりのさもあらばあれ雲る此月の秋りせの空(和泉式部集)上「さもあらばあれ
 雲井かぐらも山のまよいでいるよその月をたよ見(和泉式部物)「うちをて、旅
 ゆく人のさもあらばあれまよかきものよ君よおもも(拾玉)一「柴の戸よ、そ
 ん花のさもあらばあれあぐめてけりあうらめ一の身(小侍從集)「萩がもかお
 もたよとゆる露さりりちらさん風(さもあらばあれ)
 さもさそれサハアレナリ契云源をとめ源をとめ四男のさもさそれとひたふるよゆる
 はワトヨムヘシ

一聞え給のせ

さもさふらとせ(著聞)十一、法師が繪の故實かたをらいさといそれけるを少も
 こと、もせせさも候のせ(同)六父圖書允爲弘聞ていりよ汝かゝるふべきをば申ぞ
 殿の御名のりをり参らせぬりといへばいりぞり参らせぬことのあるべきと
 いふさるよはかゝる事をば申りといそれてさも候とせ殿の御名のりをりりうと
 こそをり参らせ候へ世よ又さこそ申候かれと陳たりける

彌させ(待賢門院堀川集)さまりへさせおそいまゝ日(玉葉)秋云々八月さりり
 おまへよ前裁うゑさせ給て人々よ哥よませさせ給ける時云々(同)同八月十五夜月

十五首歌人々よ哥よませさせ給けるついで(枕)八御硯おろしてかゝせさせ給ふ
(新古)雜云々をのこどもよおせせてこと木をそのあとようつうゑさせし時(枕)
 九、ゑなどどり出て見せ給ふ(同)同かれよ見せさせ給へ(金)雜後三條院かくれ
 させおそいまゝしてれち云々(金)同云々琴ひくとさきりせ給ひてひりさせ給ひけきバ

(同)傷 圓融院法皇うせさせ給て(同)同長保二年十二月皇后宮うせさせ給ひて(金
 葉)雜云々祭主よなさせ給へと太神宮に申こひて云々(同)同人よも見せさせ給とざ
 りけれバ(枕)七ノ猶それまよせさせ給へと集りて申まどひバ(同)四ノかから

せみせさせ給へ(狹)一上のむらぬさまをみせさせ給へることよろこび申給ひつ
つ(同)八下御木丁を引よせさせ給て(源 桐つほ)九廿おどろけ給ふ(同)三廿いよくと
ちくくのさえをならせさせ給ふ(著聞)七ノ相を見せさせられけり(同)十五さ琵琶
をよくひりせ給へ(源 わかあ)十二このあやましきをはませさせ給え(同)
上ノその日夕つりた奉らせ給(同)上五御身を心よえまらせさせ給ま(同 横笛)
廿三十とりよせさせ給ひて(同 東屋)五十七御ふみかどを見せさせ給へ(同 はし姫)卅
をたよ見せさせ給ひぬ(隆信集)云々 百首哥人々よませさせ給ひ(同)云々
人々よませさせ給ひ一多し皆如此

させも草(千載)雜上「契りおきさせも露をいのちよてあそれこと一の秋もい
ぬめり(枕)十二九「思ひたよかぬ山のさせも草されいおきのさといつけしぞ
させ(源 花の宴)四かたらふべき戸口もさしてけれ(同 空せみ)三 此入つる格子の
またさゝねバひまをゆるよよりて(催馬樂)東屋そののと我さゝめおひらいて
させ我や人づま(頼政集)上「まきの戸を忘さしを時鳥さゝつやとふ人
どいりよと

もこそあれ(源 うつせみ)六 此とかういさしてんとてからすかり(後)六戀門さゝで
あひまでと申てこそりけき(式子内親王集)七「むぐらさを宿よも秋のさづねさ
て月よさをふいこと一のみりの(源 末摘)八二間のさなる障子てづらいとつよ
くさして

○さしかため(源 よこふえ)十二このなぞかくさしかためたる
させ(傘笠)又(枕)五ノかさをもてきたるをさゝせて(万)三ノ雨ふればさゝんとお
もへるりさ此山(同)十六さよまさしてやへたよへぐりの山(源 葵)卅 志どけ
なう打たれ給へるさまながらひもさりをさしをさし給ふ(後)八戀六よみ「さ
ておと思ひものを三笠山ひかくあめのゆりよけるるなへ「もるめのとあま
たみゆればとりさやまあるくいりさして行べき(拾)別天曆御製「わりるれば心
をのみぞつくし櫛さしてあふべき布をいらね(源 末摘)廿櫛おいたれてさした
るひたひつき(太平記)三後醍醐天皇「さして行笠置の山を出しより天が下よの隠家も
か

補 させ 印ヲ水鏡名のわたくし太政官の印をさしてことを行ふといふ事を云々
補 さす 万十あーがらのをてこのもよさをわあの云々

○さゝせ(枕)六、けい一沓をどの緒をけさせ裏をさせかどもてささぎ(源紅葉賀)十二
名たりき御帶てづららもたせてとたり給ひて云々志ひてさゝせ奉りたまふ

さそ(枕)廿一、勾欄のもとよ青き瓶の大なるをゑて櫻のいみづくおもしうさ枝の五尺
をくりなるをいとほくさうたれば(後)春下「久しうれあたしちるかと櫻をかか
めよさせれさうつろひよけり(古)上春染殿の后のおまへよ花がめよさくらの花をさ
させ給へるをよめてよめる(同)物名めよけづり花させりけるをよませ給ひる

さそ(源藤のうら葉)五、わざと使さゝれたりけるををやうもの給へとゆるし給ふ

さす(源ゆふのは)廿七、志をくさしてまぬれ(伊勢物)四十一、へとうしよ松さゝせて

さす(源とどめ)廿八、大將さうづささ給へを(伊勢物)八十、かたのをかりてあまの
川のはとりよいたるを題よて歌よとて盃のさせとの給うれば(補)源梅のえ九頭
中將にさまへばとりて宰相中將よさそ

○補 さそえ 卷 和名盃類也

さす 几帳ヲ ○古へサシ几帳トイフ物アリ今時ハナキ物也行障ノ類也其形ハ帳臺
ノ小キ様ニシテ上ニウス物オホヒカケテ其中ニ在テミツカラ持テ歩行トイフ此サ
シ几帳ハ舟ノ帆ノサマシタル物ナリ古畫ニ見エタリ(落窪)廿二、御木丁さうて男君

をかれ給をせかゝづき給ふ事かぎりかゝ(源寄生)六十、弁の尼めし出さればさうト
口よ青よびの木丁さう出て参れり

さそ(菴に) (詞花)冬、西 旅宿時雨といふ事をよめる「いなりさすからの木かけよも
る月のくもるともればいぐれふるなり(抄)假ニ樹下ニ結フ菴ナリ

○わり葉さそ(源若菜)上、三 「とりをさを野べの小松をひきつれてもどのいとねを
いのるけふりなみづえさそ(万)六、瀧の上の御船の山に水枝指(同)二十三、百さらぞい
つきの枝よ水枝さす

○日かたさそ(源紅葉賀)初 入方のひりけさやうよさうたるよ

さそ(中止) (源末摘)初 の給ひさうつるもおほり(同)あか(冊)九、み、かれ給をぬ
手など心やましきやとよひきさうつ(枕)七、うけ給をりさ(源ゆふ霧)五六、條

院よ承りさうたる事侍りしやとよてかん(同紅葉賀)九、院も見さうてうつおしてお
ををを(同薄雲)廿、奏しさうてえうち出ぬことあり(同竹川)十、碁打さうて(同横
笛)十、さんしき調のかからさうりふきさうて(同東屋)九、ちひさき家ども夫々つ
くりさうたる所かれバ

さす(座主) (要覽)上、今釋氏取齊解優贍領拔者名座主謂一座之主(源若菜)上、山
の

座主よりとめて

〔彌〕さする〔宇治拾〕^{十一} あけおろしさすれとの給へばそのまゝふくらりある手
てあけおろしさせる〔同〕^{十一} よけよかりよさりたゞさすれそれくゝとありれば
聖さまあゝ候いまのさしてといふをあやにくよさすりふせけるほどよ

〔さそぐ〕貫之集^下〔六帖〕〔玉葉〕^一「あひ見せでさそぐ戀な命をもさそぐよ人
つらしと思せん〔伊勢集〕^四〔後〕^三「松山よつられながらも浪こさんこといさそぐ
よりかき物を〔六帖〕^上五「あひ見せびいけらととのをかけく身のさそぐよをく
ひとあれぬ哉〔後〕^八秋上よみ「秋風のふけをさそぐよさびき世のこととりとお
もふ物から〔伊勢物〕^{十五}〔古〕^五「天雲のよそよ人のかりゆくさそぐよめよ
とゆるものから〔伊勢物〕^{廿四}昔をとこありけりあそとともいさざりぬる女のさそ
がかりけるがもとよひやりける哥云々〔土佐日記〕此わらひさそぐよもぢてい
ぞ〔拾〕^八下よみ「名よひいへどくろくもえせうる川さそぐよわさる水ぬる
めり〔源〕^九「えうらとどあそひ侍をさそぐようちあきて〔同〕^{廿月}たよやど
るをみりを過んもさそぐよており侍りぬり〔同〕^{十五}女もさそぐよまどろまれざり
けり〔うつ布〕^{藏開}上六常よもどふらさんとそれどさそぐよ物さそぐよくつてのこ

ん〔大和物〕^四 さすがよ下司よあらねば人よとそれつりそれもせせいとさび
かりけるまゝよ云々〔源〕^八若紫「涙のどまらぬをさそぐよゆりければねん
るたり云々若君のいとむくつけういりよせることならんとふるそれ給へどさそ
よ聲さて、もえあき給いぞ〔伊勢物〕^{十四} 哥さへぞひあびたりけるさそぐよあそれ
とや思ひけんいきてねよけり〔竹取〕^四 これやとがもとむる山からんとおもへどさ
そぐよおそろしく覺えて〔源〕^六「あやかくもへたてはるりかよをかさねさそ
がよあれし中の衣を此さすがよハ上ノ句〔彌〕〔玉葉〕^二「をいまさよ一夜さりり
のあふことよかへん命のさそぐあれども〔新古〕^{神祇} 隆教「新宮よまらつとて「熊野川
くたそとやせのみなれ竿さそぐよかれぬ浪の通路○尾張家菴云度々まうでさせ給
ふ布とよ云々さすがめかれ給へり也〔同〕^{忠長}「をりよあへばこれもさすがよあ
それかり小田れかむづのゆふぐれの聲〔同〕^{西行}「何となくさそぐよをさき命りな
ありへば人やおもひるとて

〔彌〕さそぐ^{火打}〔後撰〕離別 ちちのくよへまりりける人よ火打をつりもとて 貫之
「をりくようちてさく火の煙あらば心さそぐよをさのべとぞ思ふ
さすがね〔源〕^十こなたよりあそさすがねなどもあれ○注カケガ子ノ事也

ささらへふ（金葉）戀下出 羽辨「おくりていかへれとおもひいたまひの行さすらひ

てけさのあきりか（新後）羈旅 行意「ささらふる心も身をまらせまば清見が關の月を

ままーや（玉葉）雜五 家隆「このみこしわが心もまてられて世よさすらふる身をいと

ふりな（新千）雜中 公宗女「すてぬ世のうきものとかつゝりかぐら何よさすらふ我身を

るらん（源はし姫）七冊「おちふれてさすらへんこと（續後撰）雜中 經家「何とかく明ぬくれ

ぬとささらへてさもいとづらよ行月日りな（空穂）俊隆 廿「とらおろかまくまけたも

のよまどりささらへて（源わか）七海よまを神のたすけまかへらせいのちの八布

あひよささらへままー

ささらへ（沙石）二ある僧眞言のころざし侍るよささらことありて關東へ下向し侍

り

さすき さすき 出ス

補 ささひも（貫之集）「明さてばまづささひものいとよこをたえてあまぎのあざい

けるりひ

増補雅言集覽卷之四十七 終

